ボリビア日本人移民100周年記念
アマゾン・マードレ・デ・ディオス川
追跡調査報告書

~移民の足跡を辿る~

期間：1999年8月2日~9月17日

目次

はじめに…2
主旨…3
メンバー紹介…4～8
日本における計画準備と帰国後の行動の概略…9
ボリビア日本人移民100周年記念追跡探検調査隊全行程…10~11
探検隊移動地概念図…12
行動写真…13~17

担当報告

訓練…19~21
輸送…22~24
装備…25~28
食糧…29~32
医療…33~34
通信…35
会計…36~37

インカトレッキング報告

インカトレッキング…39~40
インカトレッキングについて…41~42
インカトレッキング概念図…43

マードレ・デ・ディオス川下り報告

マードレ・デ・ディオス川下り…45~48
アマゾンの「カ」…49~50
マードレ・デ・ディオス川下り概念図…51

日系人報告~各隊員の報告から~

日系人概要：本間 俊一…53~54
日系人の現在：中村 淳一…55
日系人について：門間 奈々…56
日系人の特異な例をひとつ：小山 久美子…57~58
日系人とのコミュニケーション：多田 真由美…59~60
日本人移住者の末裔を訪ねて：片平 吉秀…61~63
ボリビアの日系人社会を訪ねて：大矢 明子…64
日系人との出会い：本多 肇…65~67
ペルーの子供たち：室 小野花…68~69

はじめに

「おもしろい話が有るんだが、探険部でやってみないか？」

探険部ＯＢの穂積さんが私達に南米川下り探検の話を持ってきたのは、1998 年の５月だった。駐日ボリビア大使として日本にやってきたガリンド大使が、新聞上に赴任にあたって発表した数々のアイディアの中に、それはあった。それを見た穂積さんが私達に話を持ってきてくれたのだ。

その話を聞いたときは、どのような探検活動になるのか想像すらできなかった。私達の代は、海外での探検活動の経験は１度もなく、それどころかメンバーの中に、隊長として探検の計画を立てたことのある者は１人もいなかった。

そのような計画発足の当初を思い返してみると、本計画が大きな事故もなく無事終えられたことは望外の喜びである。これもひとえに、関係者各位のご協力に寄ることが非常に大きい。言葉にすればありきたりな言葉になってしまうが、心の底からそう思う。

「人は人に支えられてこそ、何か大きな事が成し遂げられる」

活動を通じて私達が得た成果は数限りない。しかし１番大きな成果は何かと問われたとき、この言葉を心の深いところで悟れたのが私達の１番の成果だと、胸を張っていえる。それほど多くの方々から温かいご支援を頂いたのだ。私達は本当に感謝の気持ちでいっぱいである。

このように多くの方々に支えらながら、私達は３つの目的意識を持ってこの探検に臨んだ。それは第１に、ボリビア日本人移民の方々への理解を深めるということである。100 年前に移民の方々が辿ったルートを再現することや、現在ボリビアで生活している日系の方々との交流によって、文献ではわからないことを理解するのである。第２に、日本とボリビアの異文化交流をするということである。日系人の方々との交流もそうだが、それだけではない。この探検活動はボリビア人チームの方々と合同で行ったのだが、彼らとは深いコミュニケーションができたと思う。言葉レベルではない、長い時間を共有するからこそできる異文化交流をするということである。第３に、ボリビアの自然を体感するということである。探検活動の主なフィールドは山や川などの自然である。南米アマゾンや、インカ古代の人々が生活をしていた厳しい自然に触れるのである。

活動を終えて考えてみるに、これら３つの目的は充分達成できたと自負している。これらの目的が実際どのような活動を通して達成されたのかは、本報告書をごらん頂ければ理解していただけると思う。

私達はこの探検活動の成果を３種類の人々のために書き上げた。それは、お世話になった方々、これからまた新たな探検活動を行っていくであろう後輩、さらには将来この探検を思い出し懐かしむであろうであろう自分たち自身、の３者である。

この報告書が私達の成果を余すことなく伝えることを切に望む。

ボリビア日本人移民 100 周年記念追跡調査探検隊日本人隊隊長　片平吉秀

主旨

南米に日本人が移民し、ボリビアに彼らのうちの 91 人が入国してから、今年で一世紀を迎える。果て無き時流の中に身を置けば、100 年といっても些細な過去なのかもしれない。だが、これからの 100 年を生きようとしている私たちにとっては、およびもつかないような昔に思える。

なぜ私たちは、一世紀を経て、先達が辿った、インカトレイルをアマゾン河を行かなければならないのか。そこには 100 年経っても色褪せない自然があり、一世紀を経ても絶えることなく「日系」であり続けている人々が、在る。私たちは会いに行く、地球の裏側の日本人たちに、彼らが築き上げたアイデンティティに。彼らを受け入れたボリビアに。

そこには様々な問題があるだろう。南北問題の権化。第三世界と呼ばれる国の憂鬱。島国日本にもようやく顕在化し始めた人種差別への問題。そして、私たち自身が計画を遂行すること。見つめるべき問題は山積し、答えを出すことは困難である。しかし、私たちが行くことによりほんの僅かでも変化があることを自身信じて止まない。

私たちはボリビアに日本を伝えに行き、日本にボリビアを持って帰る。100 年の時の流れに侵食された絆を結び直す。そして我々自身が、日本を知り、ボリビアを知り、己を知ることの出来る旅になるのではないだろうか。ひいては、これらのことがボリビアだけに止まらず、世界的規模を持ち、文化間の相互理解を促進させることになれば、と願って止まない。

ボリビア日本人移民 100 周年。横浜市立大学探検部創立 40 周年。この二つの偶然を必然とし、また大きな契機と考え、ボリビアと日本との文化交流、相互理解を目的とする。

ボリビア日本人移民 100 周年記念追跡調査探検隊計画書より

メンバー紹介

本多　肇

日本人メンバー　①氏名・年齢・担当　②住所・ＴＥＬ　③所属・職業

①　片平　吉秀（２１）　日本人隊隊長
②[redacted]
③横浜市立大学商学部３年
　隊長としてなかなか動かない隊員どもの尻をひっぱたきひっぱたき、まとめ役として尽力。ボリビアーノからは「カタヒラサーン」として慕われる。

①中村　淳一（２２）　日本人隊副隊長
②[redacted]
③横浜市立大学商学部３年
　川ではＧＰＳの係として、いつも皆から「今どのくらい進んだ？」と聞かれていた。ＪＵＮＩＣＨＩは「フニチ」と読まれる。

①熊原　武博（２１）　訓練・記録（ビデオ・写真）
②[redacted]
③横浜市立大学国際文化学部３年
　誰とでもくだけて話すフレンドリーさが、時々行き過ぎて「クマは（頭が）大丈夫なのか」と心配されることも。ボリビアーノとのサッカーでは日本人チームのエースとして活躍。

①福栄　太郎（２１）　技術・記録
②[redacted]
③横浜市立大学国際文化学部３年
　自他共に認める「外人アレルギー」。この旅で多少の回復をみたらしいが。記録係として全員の日記を盗み見る権利を持った。

①本間　俊一（２１）　装備
②[redacted]
③横浜市立大学商学部３年
　持ち前のマイペースさが、場の雰囲気を和ませること度々。逆に遅刻などでメンバーを怒らせることも。

①門間　奈々（２１）　食糧
②[redacted]
③横浜市立大学国際文化学部３年
　ナナは酒飲みということでボリビアーノの意見は一致。肌の色もボリビアーノと似ているということもあって(?)、よく親しまれてました。

①小山　久美子（２１）　食糧
②[redacted]
③横浜市立大学商学部３年
　ＫｕｍｉとＫｕｍａ(熊原)がボリビアーノには間違えやすかったみたい。川の上ではいつも彼女の歌声が響いていた。

①　室　小野花（２１）　医療・会計
②[redacted]
③　横浜市立大学国際文化学部３年
　ボリビアへ、私たちが訪れる少し前に、皇族の「さやこ」さんが訪れたということもあって、呼び名は「プリンセッサ」。

①本多　肇（１９）　装備・記録（写真）
②[redacted]
③横浜市立大学国際文化学部２年
　ボリビアでは車は日本製、「ＨＯＮＤＡ」ももちろん有名。「島唄」はボリビアでの十八番。遅刻等、隊への迷惑回数最多。

①高橋　千帆（２１）　渉外
②[redacted]
③中央大学３年
　通訳として、ボリビアーノと日本人の仲介役。双方の板ばさみにあって心身共にお疲れ。

①　大矢　明子（２２）
②[redacted]
③中央大学４年
　気が付くと、いつの間にか現地の男の子、おもに少年と仲良くなっていた。旅の後半、様々な事務的作業において、リーダーの女房役として活躍。

①多田　真由美（２２）　通信
②[redacted]
③拓殖大学４年
　高橋と共に通訳として活躍。日本人の間では最初の訓練合宿から、皆の「ねーさん」的存在。

①　園田　直（２５）
②[redacted]
③　町田酒造株式会社社員
　町田社員のお二人は、さすが酒造会社だけあって酒豪。ペルーでの暇な日々は毎日飲んでいたようです。園田さんはふだんの口数は少ないけれど、移住地のカラオケではトんでました。

①濱本　幸人
②[redacted]
③町田建設株式会社社員
「ハマモタソ」とは大きいの意味の接尾語が付いた呼び名。濱本さんの乗るカヌーはいつも速かった

ボリビア人メンバー

Eudro　Galindo　　駐日ボリビア大使
本計画の発案者及び最高責任者。日本国内での訓練合宿にも参加し、大使という地位にありながらとてもフレンドリーな方。しかし時々の演説で見せる顔は、やはり大使の顔。

Diana　Galinndo
「ディアナ」。ガリンド大使の長女。パトリックと共にカヌーを漕ぐ姿、その健康美はとても印象的。個人的に、彼女の英語の歌の発音がすごくきれいで好きだった。年齢差のある我々とボリビア人グループとのパイプ役であった。

Patrick　Talley
「パトリック」。写真班。アメリカ人。ジョークと男らしさを兼ね備える、まさしく「ナイスガイ」。

Eduardo　Galindo　　将軍
「ヘネラル」。大きな体に大きな声、まさにヘネラル(将軍)といった人。川では、トランシーバが要らないのではないかとうわさされる程だった。この人の「バーモス(行くぞ)」はこの旅のキーワード。

Luis　Galindo
「ルーチョ」。その怪しげな風貌のとおり、いかにも気さくで親しみやすい野郎だ。ヘネラルとのおじおいコンビは凸凹の名コンビ。何度かジャングルの中へ狩りに連れていってくれた。

Ivo　Eterovic　　医師
「イボ」。医師として隊の健康管理を引き受けた。常にウェットスーツに身を包み、本番前の訓練でも一番やる気を見せていた。ひげと柔らかな笑顔が人の良さを表す。

Omar　Yanes　Mostajo　海軍軍人
「ヤネス」「オマール」。軍によって我々の安全対策を任されていた方。毎夜、テーブルの上に地図と書類を広げていました。

Raul　Gomes　Càrranza
「ゴメス」。オマールと並んで、海軍の「ヤネス・ゴメス」コンビ。けっこうぐだけた人で、高笑いが特徴的。

パトリシオ
ボリビアの写真ジャーナリスト。英語も話せる。何かとよくからかわれた。

Dr.　カマチョ
「カマチョ」。医師のはずなのだが、いつ見ても酒ばかり飲んでいた。いつも上機嫌であった。この人に飲ませてもらった革の水筒に入ったワインはすごくうまかった。

ボリビア海軍メンバー

カピタン
船長。いつも渋く、ダンディー。サッカーでキーパーをした時、ゴールされて頭を抱えてうずくまっていた。

ルイス
副船長。サッカーでは頼れるバック。腕に奥さんの名前「BEATRIS」のタトゥーを入れていた。

ルディ
看護士。とても親しみやすく、よく話し掛けてきてくれ、日本語も熱心に覚えていた。

コシネーラ（料理人）のおばちゃん
毎日おばちゃんの手料理を食べさせてもらった。川でのお母さんといったところ。

エレナ
コシネーラ。20歳。男ばかりの海軍と思っていたのに、こんなかわいい子がいて皆びっくり。

軍人たち
皆サッカーがうまい。

インカトレッキングメンバー

国本　伊代　　中央大学教授

今回、私たちの顧問とでも言うべき存在。たくさんお叱りいただきました。今回のインカ道コースは国本先生絶賛。

佐藤　信壽

リベラルタの日系人協会の代表役。トレッキングだけでなく、今回の旅全体を通していろいろな場面でお世話になった。波瀾いっぱいの若い頃のお話、楽しませていただきました。

Bernardo　Guarachi

「グアラッチ」。ボリビアの登山家。その風貌とは裏腹に、お茶目で親しみやすい性格。

ニキ

ガリンド大使の次女。ディアナの妹。トレッキングは全て一緒に行動した。

ラミーロ

カメラマン。ラパスでのお別れで皆にお土産をくれた。

ジャネ

ポーターの中でただ一人の女性。荷物が重たかったらしく、足を引きずって歩いていた。

ポーターたち

実は不要であった荷物を持たせてしまったりして、けっこう迷惑をかけた。

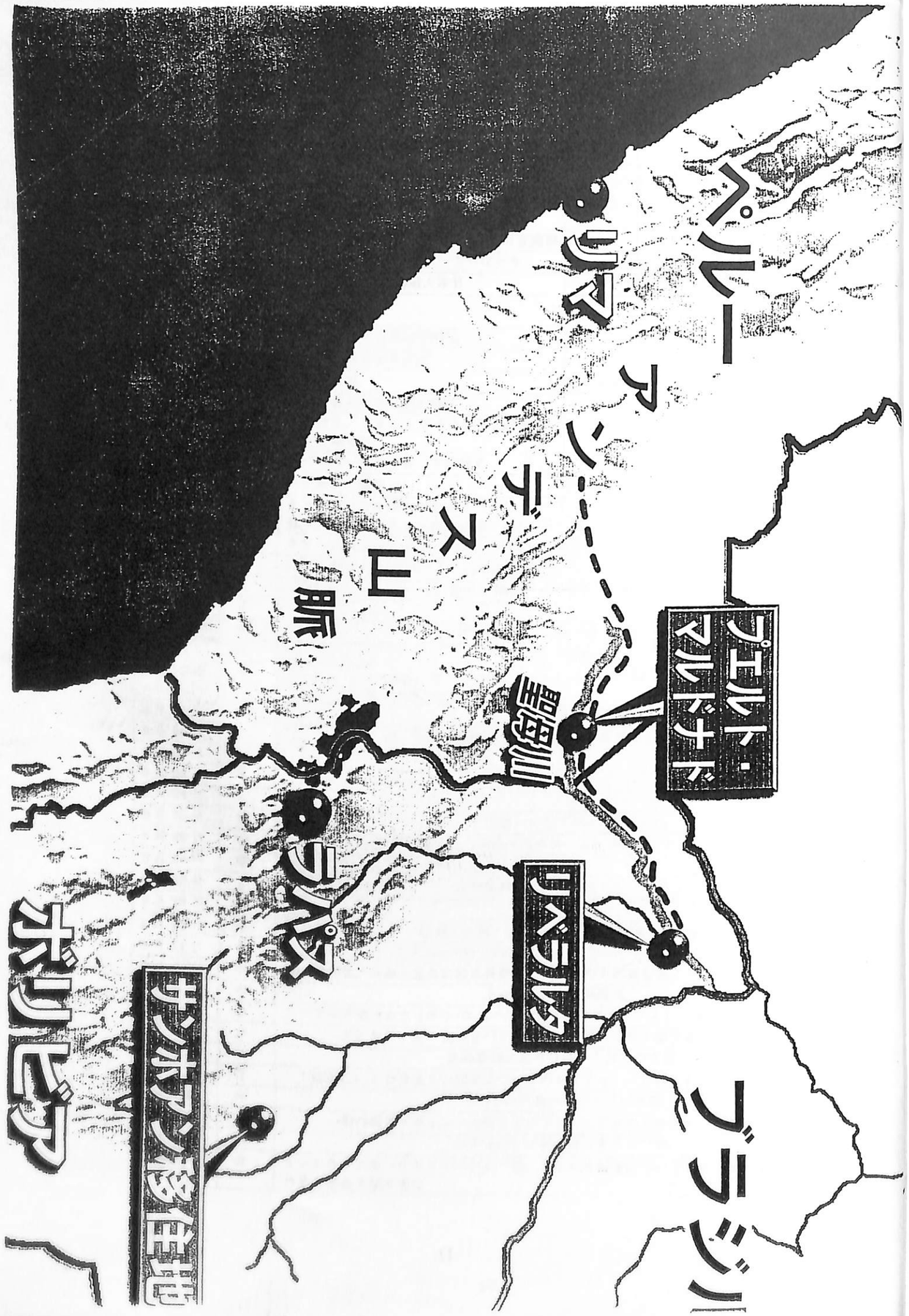
日本における計画準備と帰国後の行動の概略

1998年5月	探険部ＯＢ穂積さんよりアマゾン川下りの情報提供。計画実施の審議検討。
6月	計画実施の意思表明。駐日ボリビア大使館とコンタクトをとる。大使館と市大探険部とで計画における役割分担をする。（以後月１回のペースで大使館とミーティング）（以後月２～３回のペースで学生ミーティング）
7月	市大探険部内で参加者決定。探検部内で係分担をする。川下りの訓練合宿を行うことを決定する。今年、事前調査を行うことを決定する。 江戸川筏下り訓練合宿。
8月	天塩川筏下り訓練合宿。
9月	ボリビア現地偵察実施。
10月	偵察隊報告書作成。会計報告書作成。
11月	仮計画書作成。各係行動開始。他大学個人参加者面接。市大探険部ＯＢにコンタクト開始。
12月	
1999年1月	
2月	日本における準備計画発表。市大学生課とのコンタクト開始。神奈川新聞に本計画が初めて記事になる。協力スポンサーとの交渉開始。
3月	装備品、食糧、カヌー購入開始。
4月	相模原訓練合宿。利根川訓練合宿。
5月	鬼怒川訓練合宿（ガリンド大使も参加）。
6月	富士山訓練合宿。
7月	荒川カヌースクール訓練合宿。荷物計測。装備品チェック。荷造り開始。
8月	荷物最終チェック。荷物をトラックで空港まで運び出発。
9月	帰国報告会見。関係者への帰国報告と礼状の送付。
10月	神奈川地球市民プラザで報告会。報告書下書き。
11月	学園祭で報告発表。報告書作り直し。
12月	ボリビア報告書完成。関係者への報告書送付。

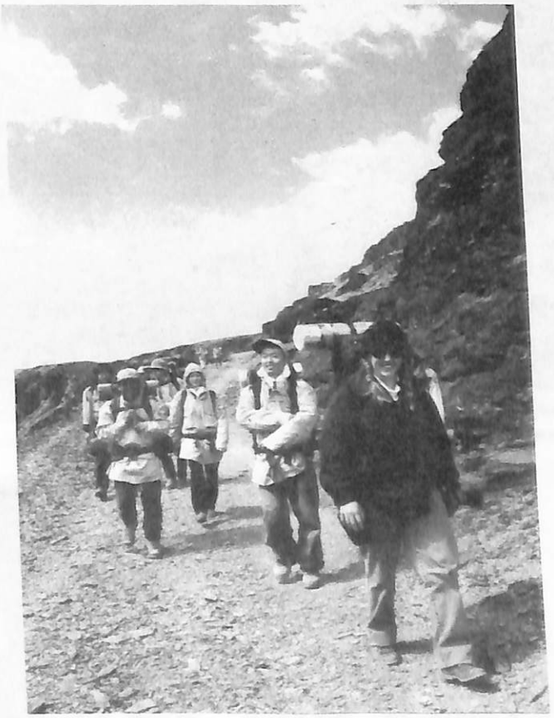
ボリビア日本人移民100周年記念追跡調査探検隊全行程

月日	曜日	ラパス隊	リマ隊
8月2日	月	成田発	成田発
8月3日	火	ラパス着　ガリンド大使主催晩餐会	リマ着
8月4日	水	日本ボリビア共同ミーティング 市内観光	国会議員 MATUDA 氏表敬訪問／文部省表敬訪問／ペルー新報表敬訪問／日本人協会表敬訪問
8月5日	木	インカ道トレッキング開始	ボリビア大使館夕食会
8月6日	金	インカ道トレッキング	リマ発→プエルトマルドナード着
8月7日	土	花村氏訪問	日本人墓地訪問／カヌー訓練
8月8日	日	インカ道トレッキング終了	
8月9日	月	記者会見／ジャイカ,日本大使館表敬訪問／テレビ局取材	
8月10日	火	ラパス発→クスコ着　市内観光	
8月11日	水	マチュピチ観光	カヌー訓練
8月12日	木	クスコ発→プエルトマルドナード着 日本人隊合流／カヌー共同訓練／日本ボリビア共同ミーティング	
8月13日	金	カヌー共同訓練／マルドナード市長主催夕食会／日系人主催歓迎会	
8月14日	土	川下り出発式典(強風により出発は延期となる)	
8月15日	日	川下り開始　マルドナード発	
8月16日	月	ヒース着	
8月17日	火	支流探索(エコボリビア宿泊)	
8月18日	水	ヒースへ帰還	
8月19日	木	ヒース発→チーベ着　サンファンの方々合流及び歓迎会 室、体調不良のためコビハへ	
8月20日	金	チーベ発	
8月21日	土	室、医師の診断により計画に戻る事を許され合流	
8月22日	日		
8月23日	月		
8月24日	火		
8月25日	水	セナ着　レセプション／歓迎会	
8月26日	木	セナ発　高橋体調不良によりリベラルタへ	
8月27日	金		
8月28日	土	大矢体調不良のため艇を下りる	
8月29日	日		
8月30日	月	佐藤氏合流／リベラルタのテレビ局より取材	
8月31日	火	リベラルタ着　到着式典／リベラルタ市長表敬訪問	
9月1日	水	慰霊祭参加／日本人協会記念式典参加／日系人の方と昼食会／ガリンド大使主催夕食会	
9月2日	木	トゥミチュクワ湖観光	
9月3日	金	リベラルタ発→カチュエラ・エスペランサ見学→グアヤラメリー着　日系人主催夕食会	
9月4日	土	グアヤラメリー発→リベラルタ着　日系人協会主催夕食会	
9月5日	日	自由参加による日系人の方との交流	
9月6日	月	佐藤氏による日系人の歴史についてのレクチャー／日系人のお宅で夕食会	
9月7日	火	リベラルタ発→コチャバンバ着	
9月8日	水	市内観光／ガリンド大使宅で川下りのビデオの上映会及び夕食会	
9月9日	木	コチャバンバ発→サンタクルス着	
9月10日	金	サンタクルス発→オキナワコロニア着　移住地の歴史についてレクチャーを受ける／日系人協会主催夕食会	

9月11日	土	オキナワコロニア発→サンファン着　各人ホームステイ先へ移動
9月12日	日	幼稚園運動会訪問／資料館見学／移住地内見学
9月13日	月	小中学校見学／病院見学／農協見学／上園氏再訪記念及び探検隊慰労会
9月14日	火	サンファン発→サンタクルス着
9月15日	水	追跡調査探検隊の計画終了におけるレセプション
9月16日	木	サッカーチーム「タフイチ」訪問
9月17日	金	日本人探検隊解散

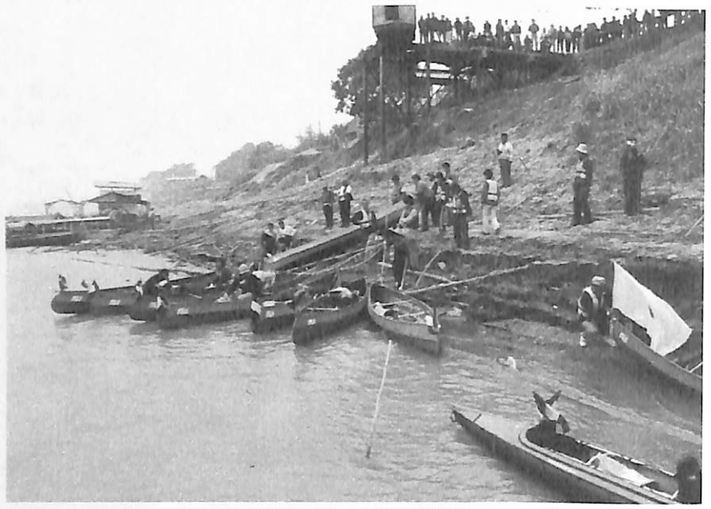


▲8月5日インカトレッキング初日、コース中最高標高4800m付近で。
バックはイリマニ山。



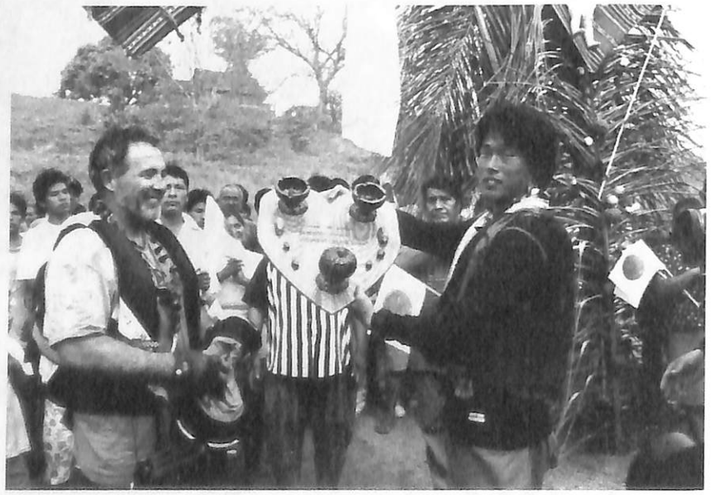
▲インカトレッキングコース。初日に最高所に達した後は下るのみ。インカ時代の石畳を行く。

▲日本人移住者、花村民次さん。トレッキングコースの途中に住み、訪問者の名前をノートに記している。



▲8月15日川下り出発日。前日出発の予定が、スール（南風）によって1日延期となった。

◀カヌーを漕ぐ室と熊原。二人乗りカヌーは前がエンジン、後ろが舵取り。大体男が後ろへ乗った。



▶8月25日セナ。川行程中最大の集落。夜にはこの日のために練習してくれた、子供たちのダンス披露もあった。

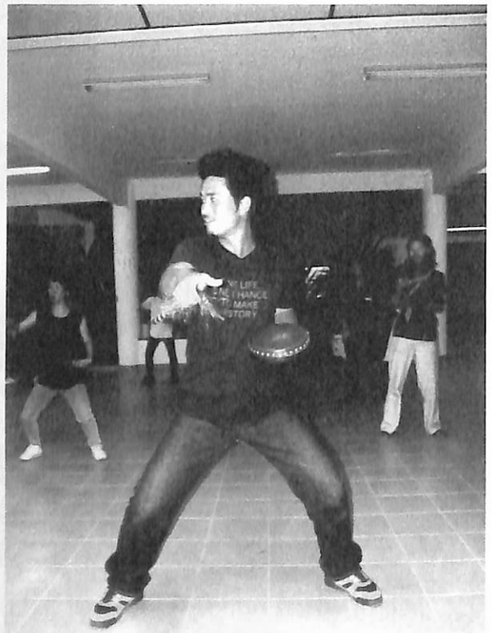
◀アマゾン川支流、マードレ・デ・ディオス川の日暮れ。

▶朝のテン場。写真のように、ほとんど広い砂浜にテントを張った。

▲8月31日リベラルタ最終目的地到着。砂浜に2千人もの人が出て歓迎してくれた。キスマークのついた室。

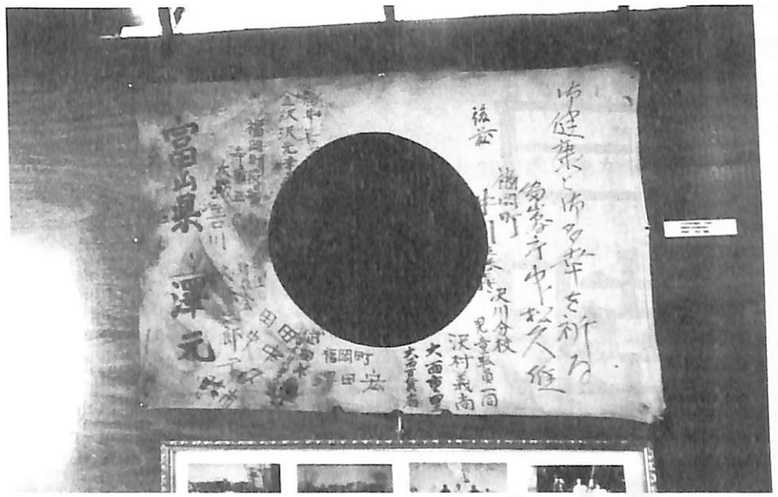
▲リベラルタの日系4世や5世の学生達。一緒に遊んだカラオケでは日本の歌も入っていた。

▲9月１０日セナ。オキナワ移住地にて。文化会館の前の開拓者像。



▲9月１０日夜。移住地の方に教わりながら皆で沖縄エイサーを踊った。浜本さん、南方出身だけあって、さすがキマる。

▲9月１１日サンファン移住地。最近オープンしたという伊藤食堂。戦後初期の日本を思わせる風情がある。



◀サンファン移民記念資料館にて。日本を発つ時の、移住者歓迎、激励の日の丸と寄せ書き。

▶サンファン移住地内、移住者宮園さん宅。大きなお宅に大きな農場をお持ちである。

担当報告

ボリビア訓練合宿

本番の川下り、トレッキングに備え日本国内で行なった訓練合宿について簡単に目標、問題点について記した。

相模川　4／1～4／2

当初の目標

①レスキュー技術の基本をマスター

②新しいカヌーに慣れること

目標の達成度

①は川の水温が低すぎて断念。勇敢にも太郎と肇が自主的に轟沈を遂げる。

②向かい風が強かったのでひたすら漕ぐ事になる。トレーニングという意味では効果があった。今から考えると、何らマニュアルもなくただ漠然と慣れる事を目標にあげた事自体がカヌーに対する認識不足だった。

その他の問題点

カヌー搬入の手違いにより合宿前にもかかわらずカヌーが手元にないという前代未聞の事態が発生する。結局、物流センターに直接とりにいく事で解決した。

集合時間の厳守の問題。この合宿に限った事ではないのが残念。

江戸川合宿　4／8～4／9

当初の目標

①レスキュー技術の向上

②カヌー運搬・組立技術の向上

③団体行動の迅速化

④カヌー合宿の基本確認

目標の達成度

① 本多、本間、門間（ややこしい）艇が沈したにもかかわらず、他の艇が先に行きすぎた為、誰も気づかずレスキュー練習にならなかった。隊全体のバランスを考える必要があった。

② 前回に比べれば格段に改善された。

③ 集合時間に遅れる事は依然として改善されず、ペナルティ制が導入される事となる。

④ 今考えると何のつもりでこの目標を取り上げたの分からないが、たぶん装備などの不備を改善させる為だと考えられる。計画がころころ変わり、初めは荒川で那珂川にかわり、合宿一日前の装備点検時に江戸川に変わった点を考えると合宿の基本などからはほど遠かった。しかし、結果的に天気も良く、風向きも味方してくれ、カ

ヌーの楽しさを満喫できたのではないだろうか。

その他の問題点

相模川・江戸川を通して言える事は、僕たちはカヌー初心者にもかかわらず、あまりに行き当たりばったり的に行動してきたように思う。主に僕が計画したのだが、川の選定についての情報収集を怠ったことに起因する。当初からカヌースクールに何名か行く計画があったのだが、今考えると実行に移すのが遅かった。

このような計画の杜撰さがつぎの鬼怒川合宿にて悲劇を生み出す事となろうとは誰も知る由がない。

鬼怒川合宿　４／２９～５／４

当初の目標

①セルフレスキューを完成させる。

②本番同様の行動日程をこなす為の基礎体力をつける。

③限られた時間でてきぱき幕営、食事の用意、撤収する。

目標の達成度

① 計画では川を下りながら、適当な場所でセルフレスキューの練習を考えていたのだが、激流に飲みこまれ、カヌー２台大破という事態になり、一時は合宿の続行も危ぶまれた。その代替策として場所を変えて、一日中レスキューの練習に専念した。２台のカヌーの損傷は手痛かったが、あの事故によりレスキューの必要性を認識できたのが良かったのだろう。幸い怪我人はいなかった。

② ５月２、３日は水なき川でカヌーを引きずるといった感であった。日本の川はこの時期になると農業用水として使用されるために、水量が激減するという事を学んだ。思うに釣り師との行くたびかのバトルにより僕たちは鍛えられていったのではないか。それほど、釣り師が多かった。まるで川を所有しているかのような身振りとどぎついなまりが印象的だった。最終日は激しい向かい風、進んでいるのか押し戻されているのか分からないほどだった。

③ 集合時間に遅れる事以外、ほぼ達成できたように思う。隊員全体が合宿慣れしていった。

その他の問題点

ブレ・ボリビア合宿という名目でより本番に近い形で望んだが何名かは温泉に入るという事件（？）が発生する。

この合宿にガリンド駐日ボリビア大使が初参加する。初参加の合宿でカヌー大破事件に遭遇するなどショックは大きかっただろう。年齢が５０を超えるとは思えないスポーツマンぶりにみな驚かされた。

富士山合宿　６／１１～６／１３

当初目標

① インカ道トレッキングに先立ち高山病を経験し、その対策を練る。

目標の達成度

① 高山病になりやすい人の判別ができた。対策としては利尿剤ソロッチの服用などがあがった。

荒川カヌースクール合宿　７／３～７／４

当初の目標

①カヌースクールに通い技術を効率よく上達させる。

目標の達成度

① Ｊストローク、ドローストローク、スイープ、ドロースイープ、カヌー双手投げ、フェリーアングル、カヌーのサイン等、学んだ事は多々あった。今まで漠然と使ってきた技に明確な名称がつけられ、参加したメンバーのスキルが全体的に向上した。講習料が一人１,１０００円というのがネックではあったが・・。

どうせならもっと早い段階で講習に参加すべきだった。

その他

一日目の行程は霧が濃くて幽玄な景色を楽しめた。目標地点にたどり着く前にダムがあり、迂回するものの再スタートに適した場所がなく車で翌日の講習場所まで移動する事となる。この時期は鮎釣りのシーズンで本来ならカヌーでもしようものなら釣り師に投石の刑に処せられるらしい。

まとめ

４回の川での合宿と富士山の合宿を行ったが、実際ボリビアに行きマードレ・デ・ディオス川を下った今省みると、計画書作成の遅れと不備、突然の計画変更等隊員みんなに多大な迷惑かけたと思う。本当に病的なほどにまともな計画ができなかった。みんなの無言のプレッシャーを感じつつ、自責の念に苛まれつつ過ごした日々を忘れられない。訓練はレスキュー中心だったが本番の川下りでレスキューが必要となるケースがなかったのは幸いとでも言うべきだろう。川自体は流れが緩やかで、特に危険な場面はなかった事が一因であるが、レスキューを必要とする状況をできるだけ作らないことが大事である。よくよく思い出してみると、本番の川下りよりも訓練合宿の方が危険度が高かったというのはなんとも腑に落ちない話ではあるが…。

輸送

片平 吉秀

今回の探検活動では、計画の規模が大きいだけに輸送は大きな課題であった。日本から太平洋を超えて、地球の裏側に位置するボリビアまで多くの荷を無事に運ぶという課題である。また、日本より格段に治安の悪い南米国内での輸送という課題もあった。これらの課題にどう対処したか、時系列に（１）輸送方法の調査→（２）輸送方法の選択→（３）実際に輸送を行って→（４）反省の順に書いて行こう。

（１） 輸送方法の調査

まず私達はどのような輸送方法があるか調べた。

その結果、日本から南米までは大きく分けて３つの方法があることがわかった。それは、①日本南米間の、自分たちが乗る搭乗便に預け荷物として預け、輸送する。②船便による輸送。③航空便による輸送。の３つである。

また、南米国内の輸送方法も大きく分けて３通りあうことがわかった。①移動に使う飛行機の預け荷物として輸送する。②航空便による輸送。③輸送トラックによる輸送。の３つである。

実際には、それぞれのケースで料金設定はどうなっているのか、輸送にかかる日数は何日かなど、具体的に調べた。

（２） 輸送方法の決定

どんな輸送方法があるのかを調べて、次は実際どの方法が私達にとってベストか選ばなければならなかった。しかし、これはなかなか難しい選択であった。その理由は、①計画上の他の原因により、輸送物の量や重さが確定しない②日本と比べ南米では、荷物の盗難が頻繁に起こる③輸送依頼先企業への交渉により価格に変動がある、などである。

結論から先にいうと、日本南米間でも南米国内でも、自分たちが乗る飛行機に預け荷物というかたちで預け、超過料金を払うことにした。

何故そのような方法を選択したのか。日本南米間と南米国内とに分けて理由を説明していこう。日本南米間で預け荷物という選択肢を選んだ理由だが、それは消去法で選んだ。他の選択肢に問題があったのである。まず航空便だが、別送で送ると荷物を到着先で何日か保管しなければならない。そうなるとその保管期間中に盗難にあってしまうだろうと、ガリンド大使がいったのである。同じ理由から船便は、なおさら駄目であった。次に南米国内の輸送方法選択の理由を説明する。それも消去法によったのだが、理由は２つある。１つ目はやはり盗難の危険性が拭えないということだ。２つ目は、南米国内の場合詳しい下調べが困難であるということだ。やはり日本で南米のことを調べるのは、言葉の壁もさ

ることながら、それを抜きにしても難しかった。

以上のような理由により、日本南米間でも南米国内でも、自分たちの乗る飛行機に預け荷物のかたちで預け輸送するとに決定した。

（３）実際に輸送を行って

ではそのように決定した輸送計画は実際どのように行われたのか書いていこう。まずは以下の荷物輸送の流れを参照していただきたい。

成田→シアトル→マイアミ→ラパス→クスコ→マルドナード
　　↘リマ→クスコ↗

リベラルタ→コチャバンバ→サンタクルス→マイアミ→成田

順番に説明して行こう。まずは部室から成田までだが、それはレンタカーを借りて成田空港まで運んだ。

そして普通に荷物を預け入れるときに、預け荷物として預けた。利用する航空会社のアメリカンエアライン社には事前に交渉してあり、超過料金は無料となっている。しかし当日は予想以上に荷物がかさみ、無料になるといっていた以上の量を預け入れることになった。しかし実際は、何とか全ての荷物が無料になった。

次にシアトルでアメリカ国内に入ったために、荷物を全て１回外に出し、移し替えるという作業をした。このときは移し替える時間が少なくかなりあわてた。

そしてシアトルを発ちマイアミに到着。ここからラパス隊とリマ隊のふたてに分かれ、荷物もそれに応じて分かれた。このときは荷の移し替えはなく、特に問題はなかった。

そしてラパスに入った方の荷物は、ボリビア人側のコーディネーターであるイボ氏がクスコ経由でマルドナードまで預け荷物で輸送できるように手配した。

それから川下りが終わって、リベラルタからコチャバンバまでの輸送だが、これも計画どおり預け荷物のかたちで行った。そこで輸送に関して初めてのトラブルが起こった。飛行機の積載能力が少なすぎて、私達の荷物を全て積めなかったのである。おかげで荷物の大半は１日遅れで私達に合流することになる。

コチャバンバ～サンタクルス間は、別送の航空便で送るようにしてみた。するとどうやらホテルまで送ってくれるようで、しかも搭乗機に預け入れるよりも料金が安かった。

サンタクルスで先について荷物が届くのをホテルで待っていると、電話連絡がきて、空港まで取りに来てくれといわれた。話が違うので直接空港まで確認に行くと、ホテルまで届けるサービスなどしていないという。どうせ１週間後にはそのサンタクルスの空港から日本へ帰るのだからそれまでそこで保管してくれと交渉する。最初は断られたり、上役に賄賂を払えばいいといわれたりしたが、結局無料で預かってくれるということになる。

サンタクルス～マイアミ間は、またもやアメリカンエアラインへ交渉した結果、無料としてもらった。

マイアミでは、フライト時間の調整により１泊しなければならず、空港から１度荷物を出さなければならなかった。とりあえずポーターに空港内の荷物有料保管場所まで案内してもらって、そこに１日預ける。

マイアミからシアトル経由で成田までは、最初にサンタクルスで交渉したときは無料になるといわれていたのだが、料金を請求された。いろいろ説明するも、そんな連絡は入っていないといわれ、結局超過料金を支払った。

最後に成田からの輸送はレンタカーによって行った。

（４）反省

サンタクルスで荷物を長時間保管してもらったのは危なかった。何も盗難はなかったが、その可能性があるからということで、日本における計画期では保管してもらうことを避ける決定をしたのに、少し浅はかだったように思う。

後は細かいところで行き当たりばったりすぎた。マイアミで１泊するときはおそらく空港に保管場所があるだろうという予測の下で動いていた。実際それはあったのだけど、確認の電話をしておくべきだった。

装備

本間 俊一・本多 肇

(1)カヌー関係

カヌーは、荷物を多く積むことと、広くゆったりと流れる川のことを考え、荷物の出し入れがしやすく、積載量の大きいカナディアンタイプのものにした。一艇だけ偵察用として船足の速いカヤックを使用した。人数が足りないときには一人でも漕げるよう、一人乗りにも、二人乗りにもなるタイプのカヤックを選んだのだが、結局人数が足りない時はボリビア人が漕いだので、常に二人乗りとして使用した。当初の予定とは異なり、実際は軍の偵察用ランチャーと大きな母船があったため、カヌーに大きな荷物を積む必要も偵察する必要もなかった。残念だったような楽だったような。スポンジは、船底にたまった水を出すためよりも、船内にこびりついた泥を洗うためにより大きな威力を発揮した。休憩の後カヌーを離岸させる際、必ず船内に水が入ったので、船底にたまった水など気にするものは誰もいなかった。むしろ足についた泥が船内にこびりつき、洗う際には苦労した。

(2)幕営用具

高地と低地にいくため、気温の高低に対応できるよう、密閉もできるが、なるべく風通しのよくなるものを使用した。川行程では、外は蚊が多くとても眠れる状態ではなかったため、テントの風通しは非常に重要な問題だった。それでも暑かったが。タープは重かったし、食事を母船で取ったため、全く使わなかった。蚊取り線香はあまり効かなかったが、気休めにはなった。だが、ボリビアーノには人気があったらしく、蚊取り線香のダンボールをあさっている姿をよく見かけた。そう、考えると現地の蚊よけ製品よりは、いくら効力は強いのかもしれない。また蚊帳は吊るところがなく、使わなかった。

(3)通信用具

水上でのカヌー相互、軍船との連絡には、特定小電力トランシーバを使った。小型で使用方法も簡単で、大変重宝した。水に強い防滴構造であったが、完全防水ではないため、ジッパー付きビニル袋に入れて使用した。高性能のトランシーバは２台とも軍に預け、ランチャ（動力付き小型船）同士の連絡に使ってもらった。この種類の違うトランシーバの使い方は、電波のトビを考慮してのものである。

拡声器をトランシーバの代わりに使うという案があったが、川においては役に立たないだろうということで、現地での購入ができたらするということになった。実際には、現地には売っていなかった。

ＧＰＳは水上での距離、速度の算出に役立った。また、陸上においても、ジャングルで道を失った隊員の命を救うという多大な働きをした。

乾電池は大量に余った。

(4)生活用具

軍による食事の提供により、調理に関する装備が大幅に不要となった。トレッキングにおいても、ポーターが調理器具を全て持っているということで、急遽不要となった。この辺のいきさつは、言葉の壁によるコミュニケーションの問題もあるが、それ以上に今回の旅のイベント的要素の大きさ、いわゆる純粋な探検性の薄さがあると思う。

ガムテープは輸送の際、荷物の梱包を補修するとき、あわただしい中での、とりあえずの応急処置に重宝する。川でもロープと並んで、何かと便利である。マルドナド（川の出発地）での買い出しでは、日本で見る布製のガムテープがなく、ビニール製の粘着力の弱いものしかなかった。日本から持っていくべきだった。

(5)個人装備

トレッキングではもちろん、川においてもスールの影響で、夜かなり寒くなるので、防寒着の充実は大変重要だった。

川において一番悩まされたのは蚊対策で、虫よけ薬、モスキートネットは貴重な財産だった。日本から持っていったスプレー缶の２，３本は使い切ってしまい、途中で買出しした。蚊取線香はボリビアにないため、余ったものを軍に寄付したら大変喜ばれた。日中、蚊対策のため長袖になるが、雨具を使うと通気性が悪く、逆に暑さにやられてしまう。

帽子は必需品だが、現地にあった、ちょうど日本のものと同じ、つばの広い麦わら帽子は使いよかったようだ。サングラスは使うものと使わないもので分かれた。

カヌー上での履物は素足かソックスにカヌーシューズかスポーツサンダルを各自好みではいていた。

カメラは防水対策ともう一つホコリへの対策も重要である。

ヘッドランプの電池は５日に１回交換する程度で十分だった。

(6)準備にあたって

メーカーに安く譲っていただくために掛け合うにあたって、計画が新聞に載ったことが非常に有効だった。多くのメーカーは最初は結構渋っていたが、新聞のコピーを添えた手紙を送り、検討していただいたところ、ほとんどのメーカーに３～５割引くらいにしていただいた。

大使側の要求が計画段階で何度も変わったため、実際には使わなかった装備を結構購入してしまった。本当に直前まで大使は言う事を変えたので、免税機関であるＡＰＩＣに手続きをしてスポンサーからの資金が下りてからメーカーに手続きをする、という手続き期間の長さもあって、カヌーのフレーム修繕のためのキットが合宿本番に間に合わなかったという不備もあった。

とにかく計画が何回も変わり、そのたびにメーカーにはご迷惑をおかけしたが、部の装備品はふえたし、終わりよければすべてよしである。

共同装備一覧

カヌー関係

品名	購入先	メーカー	製品名	規格	数量	重量	備考
カヌー	イワタニリゾート	アリー	811－16．5フィート	(収納時)43×43×105cm	11	17．5kg	折畳式
	モンベル	アルフェック	ボイジャー450T	(収納時)93×37×37cm	1	16kg	折畳式
シングルパドル	イワタニリゾート	ボレアル	ABSシングル	145cm	27	1100g	予備5本含む
ダブルパドル	モンベル	アルフェック	Kパドル－4P	(分割時)82．5cm	2	1100g	分割式
ライフジャケット	イワタニリゾート	HYD	Ad		22		
	イワタニリゾート	デイツー	カイツナ		2		XLサイズ
リペアクロス							アリー標準装備
ボンド							リペアクロス接着用
プロテクションテープ							
レスキューロープ	イワタニリゾート	ノースウォーター	スモールスローバック	6mm×21m	14		
スポンジ	イワタニリゾート	マリナーカヤックス	ジャンボビルジスポンジ	13×19×7．5cm	14		
カラビナ							カヌーを岸につなげる際使用
フレーム修繕キット	イワタニリゾート	アリー					
リバーナイフ							
ロープ							カヌーを岸につなげる際使用
マップケース	イワタニリゾート	W&B	クリアーチャートケース	42×32cm	22		小物入れと化した
防水バッグ	イワタニリゾート						

幕営用具

品名	購入先	メーカー	製品名	規格	数量	重量	備考
テント	モンベル	モンベル	ムーンライトテント2型	(収納時)46×23cm	2	2．8kg	ポール，ペグ含む
			ムーンライトテント3型	(収納時)32×26cm（ポール)60×10cm	3	3kg	ポール，ペグ含む
			ムーンライトテント5型	(収納時)21×21×64cm	3	5．3kg	ポール，ペグ含む
テントマット	モンベル	モンベル	ムーンライト5テントマット	(収納時)20×20×50cm	3	1．48kg	5人テント用
蚊帳							
蚊取り線香	アース製薬	アース製薬	アース渦巻き	一箱34巻き　14×14×8cm	大量		蚊は多いが，心休まる
蚊取り線香入れ							
オプショナルフライ	モンベル	モンベル	ムーンライトオプショナルフライ	(収納時)15×12cm	3	500g	3人テントフライ用
タープ	モンベル	モンベル	ビッグルーフ	(収納時)38×25cm（ポール)100×12cm	1	8．5kg	ポール，ペグ含む
リペア用テント布	モンベル	モンベル					

通信用具

品名	購入先	メーカー	製品名	規格	数量	重量	備考

地図					24		
GPS	EMPEX	EMPEX	ポケナビGPS38EX	156×51×32mm	3	270g	うち英語版1個
トランシーバ	ALINCO	ALINCO	DJ-CH11	64×113×32mm	16	180g	うち予備4個
	山本無線	ICOM	IC-Q7		2	170g	
拡声器							現地購入できず
アルカリ電池	ヨドバシカメラ	Maxell		単3	460		100本ほど使用
フィルム		フジフィルム		ISO400, 800	100		新聞社からの寄付
			生活用具				
品名	購入先	メーカー	製品名	規格	数量	重量	備考
ポリタンク					適		水を現地購入
無公害洗剤					適		購入せず
コッヘル					2		
火器	エイアンドエフ	MSR	MSRWhisper light international TM600		8		
燃料ボトル		MSR	FUEL BOTTLE	1ﾘｯﾄﾙ	8		
浄水器	飯塚カンパニー	Sweet Water	Guardian	760ﾘｯﾄﾙ浄化能力	5		替えカートリッジ付き
浄水剤		オーヤラックス	ピュアラックス	500ml	1		使用せず
灯油					300ﾘｯﾄﾙ		購入せず
ライター					20		現地購入、煙草用
マッチ					10		現地購入
ラップ					5		購入できず
アルミホイル					20		購入できず
ノコギリ					4		現地購入、使わず
ナタ					10		購入せず
カナヅチ					3		現地購入、カヌー修理用、使わず
マチェテ					2		購入せず
ラジオペンチ					3		現地購入、カヌー修理用、使わず
針金					20m		現地購入、カヌー修理用、使わず
ガムテープ					20		現地購入したが使えず
スコップ					1		現地購入、使わず
砥石					3		現地購入、使わず
スズランテープ					10		現地購入
ロープ					100m		現地購入、物干し用、カヌーのいす止め
釣り道具							現地購入
ビニル袋					100		現地購入、ごみ袋
輪ゴム					2箱		現地購入、ほとんど使わず
マジック					10		現地購入
ろうそく					25		現地購入
バケツ					3		現地購入
ブルーシート					8		現地購入、荷の雨よけ
輸送用袋				コーヒー輸送用麻袋	50		雑物入れ
温度計					2		購入せず

食糧

門間 奈々・小山 久美子

食糧計画をたてるにあたり以下の二点に留意した。

1 調味料、カロリーメイト、ポカリスウエット以外のものは現地購入

2 基本根菜類を中心とした献立の考案

当初天山遠征を参考に、日本からジフィーズ等の簡易食品を予備食として、また肉類をフリーズドライ化して携帯することを考えていた。しかしカロリーメイト等で既に規定の輸送重量超過の恐れがあったので、コスト削減の為現地調達中心の食糧計画とした。
また長期にわたる合宿、アマゾン川流域の気候等も考慮に入れ、長期保存可能な根菜類をできるだけ利用することにした。

国内準備

食糧計画(※表1)に従い、国内で準備する物は全てメーカーに協力を依頼した。交渉手段としては、まずスーパーへ行き各メーカーの住所を調べ、合宿の趣旨と協力依頼の手紙を送り、後日こちらから連絡するという超原始的な方法を用いた。突然の一方的な要請にも関わらず、各メーカーからの対応は非常に好意的で、結果として3社(※表2)から協力を得た。現地調達物資についても、同行するボリビア軍隊と大使を通じて連絡し、ボリビア国内での食糧確保を依頼していた。こうして着々と国内準備を進行させている時、出発1ヶ月前になって「食事は全てこちら側に任せて欲しい」とガリンド大使からの要請があった。既に現地で料理人を雇ってしまったらしい。従来の合宿のように自炊を念頭においていた私たちは、突然の計画変更に驚いたが、既に協力を得ているメーカーの製品は持っていくという条件で大使の提案を承諾した。

現地での食糧

1 インカ道トレッキング

当初からコシネーラ(料理人)の同行が決定していたので、私たちは直前になるまで何を食べるのか全く知らなかった。以下ある一日の食事メニュー

朝食　コーンフレーク　ジャム　クラッカー　コーヒー　紅茶　コカ茶

昼食　パン　リャマのチーズ　リャマのハム　紅茶

夕食　カレースープ(米入り)　スパゲッティー

他の日もほぼ同じようなメニューであった。

2 マードレ・デ・ディオス川

朝食　パン　コーンフレーク　ジャム　濃縮ミルク(タピオカ入り)

昼食　カロリーメイト　グレープフルーツ　バナナ

夕食　スープ　米　肉ｏｒ魚料理　揚げバナナ　ユカイモ

同行した母船に冷蔵庫があった為、肉料理が思いの外頻繁に出た。ボリビアでは米を一度油で炒めてから炊くのが一般で、食べなれていない日本人の中には胃がもたれる者もいた。グレープフルーツは川周辺の集落から軍隊の者が調達してくるらしく、毎日余裕で１人当たり２～３個は食べた。現地で私たちが購入した酒類は誰かの誕生日などに登場し、変化の無い川での生活の娯楽品として重宝した。行程中日本人隊の酒が不足し(※注１)軍秘蔵の酒まで半強制的に登場させ、ほとんど飲み尽くした。酒は日ボ両国の友好に大きく貢献したのは言うまでもない。今回の合宿で川魚の刺し身も結構美味いという事が証明された。アマゾンに再び行く者がいれば、山葵と醤油の携帯を薦めたい。ポカリは水分補給の為重宝したが、やや量が足りなかったようである。

現地での食糧事情

川下りの出発地点であるプエルトマルドナードの市場では当初の予想に反して比較的なんでも入手できた(※表３)日本人移民の居住地であるサンファン地区では、お茶漬けや山葵、桃屋の海苔佃煮、豆腐など日本の食料品店となんら変わりない品揃えである。
ユカイモはただ茹でるだけで食べれ、保存も効くようなので長期合宿にはもってこいの１品である。缶詰も肉・魚ともに種類も豊富で、地域差はあるがボリビア国内のみでの食糧調達も可能であるように思われた。

反省点

コシネーラにより至れり尽くせりの食事で、 普段の合宿とは大分趣が異なっていた。カロリーメイトは日程の短縮化に伴い、膨大な数が余ってしまった。しかし食糧をすべて積んだ母船が座礁した時等の、万が一のハプニングに柔軟に対応できるよう各艇に余分に載せておくべきであった。安楽な現状に甘んじてしまい、基本的なことを忘れていたのではないだろうか。どうでもいいがマサコ(注２)はあんまり美味くなかった。

注１ 町田グループから会社命令で半強制的に連れてこられた濱本・園田の２名が、異常なまでの酒飲みであった事に起因するのは、疑いようの無い事実

注２ 乾燥芋をもどし、乾燥バナナ・干し肉と混ぜたもの。やたらしょっぱい上に砂が入ると不思議な食感が楽しめる。

表1　　幻の食料計画

食事は朝、夕のみ作り、昼は調理の手間を省くために携行食を食べる。また調理は料理人＋学生２人で行う。果物は腐敗の可能性があるため青バナナを持っていく等の工夫をする。釣りや狩りをして魚や動物などの食料が手に入ったときは、＋αの食事とする。(はじめからこれらの食料が手に入る保証はないので当てにしない。)肉は現地で購入する干し肉とベーコンを使用。

予備食(行程が延びたときのため)に現地で調達する米とパスタを10食×42人分別に用意する。非常食には現地購入の缶詰(魚・肉)とナッツを携帯。

国境のヒースまでの4日はマルドナードで調達した食材で、メニュー1～4を作り、ヒースからは1～7を気分や状況に合わせて3回ローテーションさせる。カヌーの全行程は27日で、4日＋(7×3＝21日)＝25日なので残りの2日はメニューA・Bをどこかに組み込んで補う。それ以上の日程については予備食や途中の町で仕入れる食糧を考えている。

	1	2	3	4	5	6	7
朝	スープ煮 ショートパスタ じゃがいも 人参 玉ねぎ	漬け物 缶詰 スープ 米	パスタ パスタソース	ポテト料理 玉ねぎ じゃがいも カレー粉 キュウリ	パスタ パスタソース	カレーピラフ 米 ベーコン カレー粉 人参 じゃがいも スープ	かやくご飯 米 かやくご飯の素 スープ
昼	ビーフジャーキー クッキー バナナ	カロリーメイト りんご	ビーフジャーキー クッキー バナナ	カロリーメイト バナナ	クッキー りんご	キュウリ カロリーメイト ビーフジャーキー	カロリーメイト バナナ
夕	米 トマト煮 干し肉 ホールトマト じゃがいも 人参 玉ねぎ コンソメ	米 シチュー 干し肉(ベーコン) じゃがいも 人参 玉ねぎ シチュールー	米 カレー 干し肉 じゃがいも 人参 玉ねぎ カレールー カレー粉 小麦粉	米 コンソメ煮 ベーコン じゃがいも 人参 玉ねぎ コンソメ	米 肉じゃが 干し肉 マロニー じゃがいも 人参 玉ねぎ 醤油 酒 みりん	すいとん じゃがいも 人参 干し肉 小麦粉 米 ふりかけ	トマトリゾット 米 ホールトマト 人参 玉ねぎ じゃがいも ベーコン スープ

	A	B
朝	パスタ	フィッシュフライ 米
昼	クッキー バナナ	クッキー バナナ
夕	魚と豆のスープ 米	ナン カレー

表２　協賛メーカー一覧

ＳＢ食品より

ビーフシチューのルー	1ｋｇ(50 人分)	
ハヤシライスのルー	〃	
カレールー	〃	全て寄贈

大塚製薬より

ポカリスエット	１００袋	寄贈
カロリーメイト	４２０箱	市価の半額

ヤマサ醤油より

醤油	４本	
ぽん酢	１本	全て寄贈

表３　現地購入品

ピスコ	×３	コーラ	×２
インカコーラ	×２	ワイン	×３
ウィスキー	×３	果実酒	×４

以下予備食として

飴	徳用袋×５	クッキー	×２０箱
カレー粉	×１ｋｇ	パスタ	×２ｋｇ
桃缶	×５ｋｇ		

非常食として

魚の缶詰め　一人あたり２個

医療

室　小野花

１　医療パック

医療パックは６組（内服、外用各 １ 個で１組）を持って行った。行動中は学生隊員が１人 1·個を装備することにした。（医療パックの数としては過不足のないものであったと思われる。）特にカヌーでの行動中には、各艇に内服、外用の医療パックを１組装備できるようにしたが、再三の注意にも関わらず、母船に置いたままの者がいた。この点では徹底が必要であり、医療係として反省しなくてはならない。

また、医療パックはボリビア隊への医師同行が事前に分かっていたため、通常の合宿と内容は特に変わらない。内容については以下の表を参照していただきたい。

	カテゴリー	商品名	個数	備考
内服薬	風邪薬	パブロン	１瓶	
		イブ	１箱	
	胃薬	新三共胃腸薬	１瓶	
	止瀉薬	ワカ末止瀉薬		
	整腸剤	ビオフェルミン	１瓶	
	利尿剤	ダイアモックス	1人10錠	トレッキング隊のみ
	マラリア予防薬	メフロキン７mg		現地購入
外用薬	消毒液	オキシドール	１本	
	目薬	抗菌アイリス	1/2 箱	
	経皮鎖痛剤	ﾒﾝｿﾚｰﾀﾑ ﾗﾌﾞ	1/2 本	
	化膿止め	ﾃﾗﾏｲｼﾝ軟膏	1/2 本	
	虫刺され薬	キンカン	１本	不足
	皮膚炎薬	ムヒ	１本	不足
		バンドエイド	90 枚	
		湿布	５枚	
		包帯	１巻	
		紙テープ	１巻	
		ﾃｰﾋﾟﾝｸﾞ　5cm	１巻	
		7cm	１巻	
		ガーゼ	１袋	
その他		体温計	１本	暑さのため破損
		耳かき	１個	
		爪切り	１個	
		トゲ抜き	１個	

2，反省

カヌーの全行程にボリビア人医師、従軍看護士の同行が会ったため、医療係が治療することは一度もなかった。医療パック内の薬品についても個人が必要なときに、必要なものを使うことにした。いちばん多く見られた病気は下痢だったが、ほぼ慢性化し、止瀉薬を服用した者はほとんどいなかった。その他、リバーナイフで手を切るなど軽いけが、アレルギー性の蕁麻疹などもあったが、すべて医師が対処した。

カヌー後、スケジュールの忙しさから疲労が溜まり、体調を崩す者が多かった。

約２ヶ月に及ぶ長期活動ではあったが、深刻な病気、けがもなく、全員が無事に帰国できたことが何よりであった。心配された南米やアマゾン地域特有の伝染病もなかったようで、幸いであった。医療係である自分がもしかしたらいちばん虚弱体質であったのではなかったのだろうか。他の隊員の健康優良児ぶりは頼もしい限りであった。

今回は医師の同行もあったため、特に事前に医療知識を学んだりしなかったが、やはり緊急時に備えて人工呼吸くらいは全員で練習してもよかったように思う。人工呼吸、応急処置については、医療係である私のみが事前に本を読んでおいた。

危険生物などについても、余裕があれば調べておきたかったが、あまりの種類の多さに挫折したことをここに記しておく。

通信

本多　肇

〈定時連絡〉

毎日行うことになっていたが、実際は日本まで伝わらなかった。原因は中継となる日系人の不在である。

〈緊急連絡〉

緊急を要する連絡は一回もなかった。

〈通信体制〉

	場所	使用機器
川（フィールド）	カヌー ↓ ランチャ（動力付き小型ボート）	トランシーバ 軍の無線・トランシーバ
ボリビア	母船 ↓ ボリビア軍基地	軍の無線
日本	↓ リベラルタ日系人 ↓ 駐日ボリビア大使館 ↓ 留守本部	国際電話 電話

使用機器は川で使うトランシーバのみ、隊で用意したものである。トランシーバの具体的な詳細は〈装備〉を参照。

通信体制については、当初、日本との直接連絡（留守本部との日本語での通話）体制をとるかどうかが議論となった。つまり、イリジウム携帯電話を使うかどうか、ということである。結局は、予算の都合上イリジウムの使用を断念し、上のような体制になった。

イリジウム使用中止の決定後、短波無線による、ボリビア国内の日系人との日本語通話という手段を検討した。しかし、無線機の周辺機器（アンテナや電源装置）の確保、その設置なども含めた運用に際しての技術、ボリビア国内法との問題（法律に関しては、今回の場合は、準公式的という我々の立場、ボリビアの法整備の観点から、大した問題ではないといえる。）など、考慮すべき点が多く、その時点であまり時間がなかったこと、また結果的に予算の軽減が大してないことから、結局とりやめた。（ただし、予算の問題では、短波無線の推進を図る団体から安くレンタルするという手段があった。時間的余裕が欲しいところであった。）

会計

室 小野花

（1） 資金

資金は、町田酒造株式会社および横浜市立大学探検部ＯＢ有志の寄付であった。探検部ＯＢに対しては、この探検計画の詳細がほぼ決定した二月上旬に趣意書を同封の上、郵便にて寄付を募った。結果、温かいご厚意をいただくことができた。方法については賛否あったが、振りこみ用紙は同封しなかった。

また、町田酒造株式会社には、資金面の多くを負担して頂き、感謝の言葉もない。町田酒造株式会社の協力がなければ、この計画も実現しなかったであろう。

（2） 資金管理

資金管理については、(財) 国際協力推進協会（以下ＡＰＩＣ）へ依頼した。これは寄付金にかかる税金軽減策としてである。よって、学生による探検費用の管理・運用は実質的にはなく、すべて書類上の処理となった。しかし、この方法は時間的なロスが大きいことや隊員による物資購入時の立替払いの負担などがあるため、有用とはいえなかった。予算分をあらかじめ部口座に振り込んでもらい、その金額内での資金管理・運用などの形をとるなど、より自主的な管理をすべきであった。

（3） 予算

各係別に、必要物資の選定および購入時の必要金額概算を提出し、ミーティング時に全員で話し合ったあと予算を決定した。しかし、この予算はあまり厳密なものとはならず、あくまでも予定であり、順次、必要品を購入することとなった。

（4） 請求方法

国内での、必要経費の請求は以下のように行った。

① 物資購入（原則として隊員による立替支払い）
② 請求書の郵送　２部　（ＡＰＩＣと在日ボリビア大使館）
③ 大使館の承認後、探検部口座へ振込み
④ 各個人へ支払い

この方法だと手元には一切請求書が残らないため、請求書はコピーをとり、必要事項（購入品の詳細、立替者、請求書受取日・郵送日など）をノートに書きとめた。また、ＡＰＩＣへの請求時には請求書とは別に、購入品の詳細を同封した。

一部、メーカーから直接ＡＰＩＣおよび大使館へ請求という形をとったものもあった。

ボリビアおよびペルー国内では、大使館から仮払いを受けて物資購入を行った。同様に

個人滞在費も仮払いを受けた。

（5） 問題点および反省点

一番大きな問題はＡＰＩＣとの連絡不足であった。最初の請求からすでに五ヶ月以上が経ったにもかかわらず、未だ支払いがなされていない。学生の立替購入分はまだしも、メーカーへの直接振り込み分も未納のままである。このような状況はＡＰＩＣとの問題という以前に、横浜市立大学探検部としての信用にかかわる重要な問題である。帰国後、未納と分かって以来、再三の支払い要求はしているのだが、「ほかの仕事が入った」などといわれるばかりで前進しない。ミレニアムを迎える前に、何とかしたいものだ…。

反省点としては、まず現地購入資金や緊急予備費をすべて現金で持っていたことである。ボリビアの国内事情を考慮してのことであったのだが、やはり一部をトラベラーズ・チェックにするなどの配慮が必要であった。また、個人滞在費について曖昧な点が多く、隊員に迷惑をかけてしまった。現地での領収書の問題や購入可能品の範囲など、隊員個人の判断に任せたが、事前に決めておくべきであったかもしれない。

（1）でも記したが、もっと資金を自主的に管理するような方法をとるべきであった。そうすれば、予算も生かせたであろうし、ましてや未払いなどという事態にはならなかったはずである。仮払い等の方法をとってほしいという要求を大使館やＡＰＩＣにしなかったことが悔やまれる。

こうして報告書を作成しながら振りかえってみると、ＡＰＩＣに悩まされただけの係という感がある。いまだに支払われない隊員の立替金が一日も早く返ってくることを願ってやまない。資金管理･運用という、探検を円滑に進めるためには欠かすことのできない部分を自分達でできなかったことがこの探検を象徴しているように思えてならない。正直、自分でもやり遂げたと思えないことが悲しい。

インカトレッキング報告

インカトレッキング

目的

8月6日より8月10日までの3泊4日で、高度5000mから1500mまで徒歩にておりる。主たる目的として、行程中に隠棲していらっしゃる戦後日本人移民の花村民次氏に会い、氏の経験談を拝聴すること。また、この旅の根底にある目的としての100年前の移民の方々の足跡を実体験に基づき理解するということである。

装備：今回の追跡調査は、国ぐるみの大きな計画であるという特質性より、ポーターがついてくれるなど、通常の探検部の計画と性質を異にする。ここでいう個人装備とは、個人の携帯した装備であり、共同装備をポーターの持ったものとする。
個人装備：ザック・シェラフ・シェラフカバー・テントマット・カッパ・トレッキングシューズ・防寒具(フリースなど)・医療パック・ポリタン・ナイフ・コッヘル・ライター・フィールドノート・ヘッドランプ・電池・コンパス・ソーイングセット・カメラ・トイレットペーパー・ビニール袋・服・靴下・下着・帽子・手袋・タオル・歯磨きセット・日焼け止め・石鹸・非常食・個人の判断による嗜好品など
共同装備：テント・火器・調理用鍋・食糧・水

メンバー：トレッキングには全員が参加したわけではない。ペルーのリマで川下りの準備を進めている人間と今回のトレッキングに参加する者とに分隊している。
日本人隊：隊長 片平吉秀。記録 熊原武博。記録 福榮太郎。装備 本間俊一。装備 本多肇。通訳 多田真由美。中央大学教授 国本伊代。
ボリビア隊：ナビゲーター グアラチ。特別参加 ニッキー。ポーター3名。食糧係1名。

行程記録：目を見張るのは、植生の変化だった。標高5000mには草すら見当たらず、腰を屈めてみると、苔のような高山植物が散在するだけであった。しかし、一泊目の標高3500前後ではすでに低木が見られ、二日目には高木が道の両脇に覆い被さってくる。三日目の花村氏宅付近には、自生ではないのかもしれないが、バナナの木が果実の房を実らせている。気温は5000m付近では摂氏0度前後。最終日の1500m付近では30度足らず。気温差にして30度近く、水と風呂のお湯ほどの差がある、といえば想像に易いかと思う。その間の植生の変化というのは、想像を絶するものがある。その行程を徒歩で経験するというのは、非常に貴重な経験であった。

また、二日目の夜に見た星空と蛍の光には、一同異口同音にその景色の現実離れした神秘さを述べている。月に照らされ暗いシルエットとなった木々に無数の蛍がとまり、短い一生を飾るように、オスたちがメスへ愛慕の情を灯している。それは12月24日のモミの

木よろしくといった様だった。天上にはサザンクロスが、また無数の星々が瞬き、このような場で神を語るのはいかがなものかとも思うが、その存在をどこかで感じざるをえないような景色だった。

もちろんこのようなすばらしい経験ばかりではない。標高5000mというと日本一高い富士山よりさらに1500m以上高い。初日には高山病にやられ寝込んでしまった隊員も少なくない。また防寒を徹底したといっても氷点下を下回る寒さと、最終日の亜熱帯に近い暑さとの温度差には苦しめられた。体の隅に残る時差ぼけの疲労と、登らずに「下る」という日常において余り使わない筋肉の悲鳴。ただ、このような困難も心地よいと思えるほど充実した経験ではあった。

また、100年前の日本人移民の方々へ思いを巡らすと、彼らは私たちとは逆に登っているわけである。道の傾斜は場所によって変化はあるものの概してきつい。また彼らが山越えを試みた時期というのは乾季と雨季の間で、山は吹雪く季節となる。その中彼らは私たちのような防寒着もなく、街で買った毛布を体に巻き付け、山を越えたそうである。中には家族連れで試みた人々もいるらしい。当時の移民の方たちは、働き盛りの20代30代の独身男性が主だったそうだ。それでも吹雪く5000m級の山をたいした装備もなく、越えたというのは、現実下っただけで顎の上がった私たちには、想像を絶するものだったのだろう。一歩間違えれば、死。彼らの前には常に死線がちらついていたのではないだろうか。今回のトレッキングを通して、当時の移民の方々のフロンティアスピリットを痛感した。

四方山話：ナビゲーターにグアラチという登山家がついてくれた。彼はエベレストに二度アタックし、一度は成功さしている南米でも有名な登山家らしいのだが、見た目はただの気のいいおっさんである。彼に言わせると「フジヤマ？フフン ベイビィ マウンテン」だそうだ。他にも女性の口説きかたの指南だとかろくでもないことしか教えてもらわなかった。もちろんろくでもないことしか聞かなかった我々にその原因はあるのだが。そんなものだから私の彼への理解とは、前述通り気のよいおっさんである。しかし、そのイメージは日本に戻ってから覆されることになる。この時分隊としてリマに滞在していたメンバーの一人が、日本に戻ってきてからのミーティングでボリビアで買ってきた切手を見せていた。そのときどうも見たことのある顔が切手になっていると思っていると、グアラチその人ではないか。一同騒然。その切手に描かれている毅然とした彼の顔のしたには、小さな文字でグアラチと記されている。間違いない。彼は偉かったのである。切手に描かれるような人間を前にして…。一同絶句。覆水盆に帰らず。後悔先にたたず。ただ今でも彼のことを思い浮かべると「げへっへー」という笑い声が聞こえてきそうだ。

（注：花村氏のことに関しては「日系人」のところで詳細を説明する）

インカトレッキングについて

門間 奈々

今回の趣旨の中に「100年前に日本人移住者が辿った足跡を追う」というものがある。それに関連してマードレ・デ・ディオス川下りと山越えが計画された。本来ならばペルーからボリビア国内へ抜けるルートを行かなければならないのだが、現在そのルートは大変治安が悪い(山賊出現の噂アリ)らしい。ガリンンド大使からの提案で「インカ道の奥地に隠棲する花村さんに会う」という目的に何時の間にかすり変えられていた。しかも謎の花村氏についての情報は全くない。日本人・男だけである。しかし各々自分の係の仕事が忙しいので、みんなもあえて彼については触れなかった。なんだか良く分からないまま彼に会いに行く事になってしまったのだ。

日本人隊の中で本格的な登山経験のある者は少ない。かく言う私も例外ではない。出発前に高山病対策として登った富士山が初体験。今回のインカトレッキングも「女性が少ないとテレビ映りが悪い」という大使のわけの分からん理由で嫌々駆り出されたのだ。

初めての登山、しかも日本一に登ってしまった私は、まんまと高山病にやられた。女で1人余裕で登頂し「ちょろいじゃん、富士山」などとほざいたのがいけなかった。就寝になって、寒さと頭痛が襲ってきた。ほとんど寝られず、一晩中心の中で山の神々に謝りたおしていた。しかもこの合宿で、かつてはマシーン片平と詠われてきた隊長も、唇を紫色に染めながら頭痛と戦っていた。高山病と経験不足。インカトレッキングへの不安要素は大きい。大きな爆弾を抱えたまま本番となった。

ラパスから車で2時間ほどの距離にスタート地点がある。ここが今回の出発地点だ。あと数百メートルで頂上という場所で車から降ろされ、記念撮影をした後トレッキング開始。日本人9名、ボリビア一ノ9名という大所帯で登る。大使は記念撮影というおいしい所のみをもっていって帰ってしまった。頂上までの数百メートルが酸素欠乏及び高山病による頭痛の為、何千キロにも感じられる。大昔に十キロ走った時よりも辛い。飄々と歩いていく佐藤さんまで、理由もなく憎く思えてくる。ウォークマンから流れてくる宇多田ヒカルも、今の私にはなんの慰めにもならない。

やっとの思いで登頂。目の前に日本では見る事のできない雄大な景色が広がる。頂上は4800メートル。登山2回目にして富士山を余裕で越えてしまった。草木1本生えていない。見事なまでの快晴と素晴らしいパノラマの中、ひたすら写真撮影。開始から30分にも関わらず既に満身創痍であった。

あとは下るのみ。しかし下っても下っても高山病。現地で購入したリーサルウェポン「ソロッチ」は鬼畜・福栄により最早かけらも残されていない。かつての高山病仲間であった片平・福栄はめでたくメンバー脱退。無事卒業し、にこやかに歩いている。「南米デビューめ」と臥嘗薪胆の思いを胸に抱きひたすら足を進める。途中高山動物リャマと出会う。やつらはお尻をプリプリさせ、排泄物を撒き散らしながら嵐のように走り去っていった。とてもスカした顔をしていた彼らのチーズとハムが昼食に出た。美味。

テントを張るとともに寝込んだ私に対し「スープ飲む？」「ソロッチ貰ってきた」等皆恐いほど優し

い。これも一種の高山病だろうか？と疑いたくなる程である。しかし本多がテントへ入ってくるなり、異臭騒ぎが。いくらソロッチをくれた恩人とはいえ、納豆臭い足にはさすがに刺し殺したくなる。寒さ・高山病・本多。まさに三重苦である。

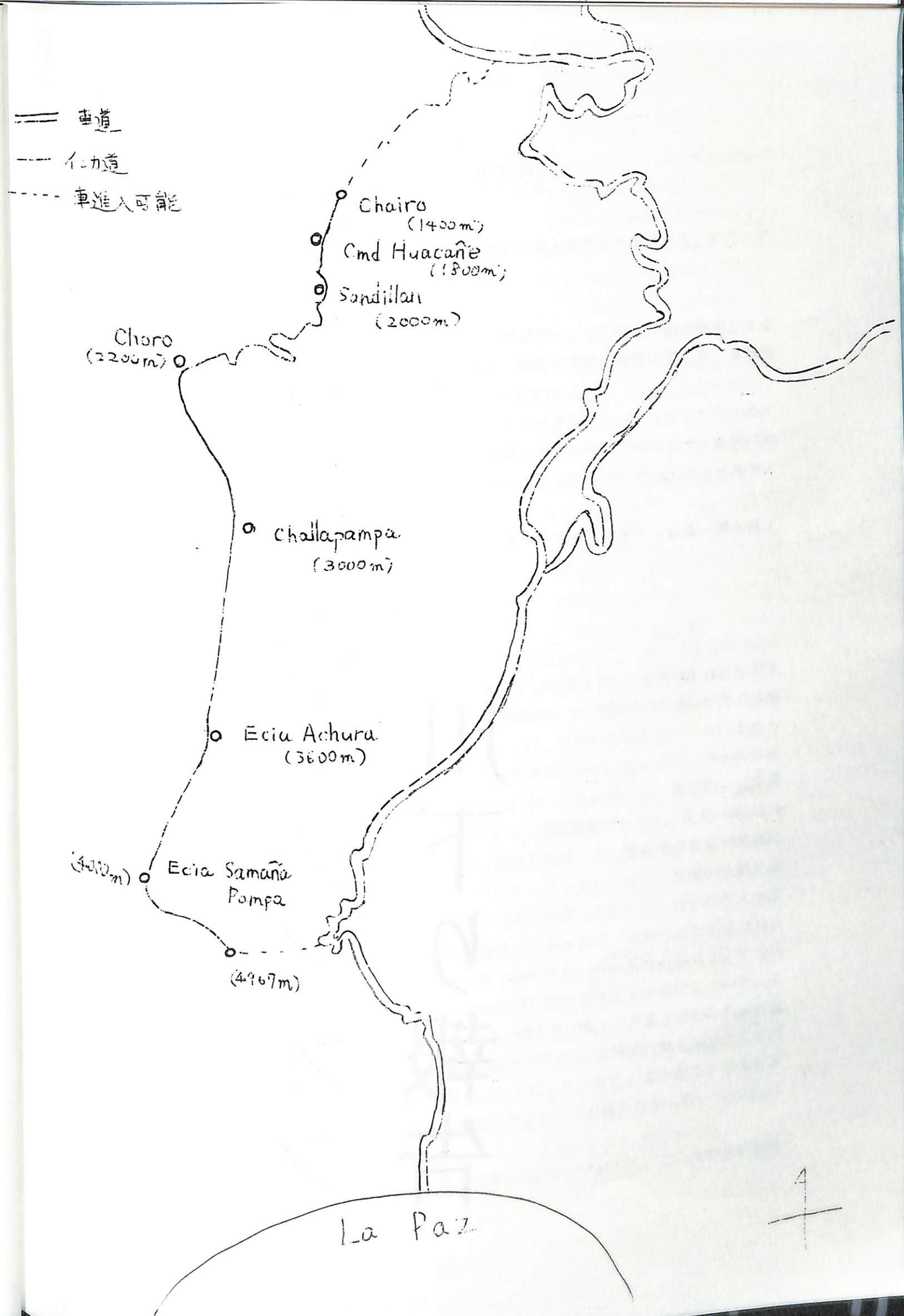
問題の一日目を越えると後は非常に楽勝であった。丈の低い草から木へ、湧き水から川へと下るにつれて景色の変化も楽しめる。2日目の夜の夜景は見事だった。空一面の星とクリスマスツリーのように点滅する多数の蛍が、幻想的な空間を演出していた。南十字星の下で真っ裸でになって岩の上で踊り狂う熊原の尻が、今でも忘れられない。

今回のトレッキングの目的である花村氏の家に近づくにつれ、私たちは佐藤さんから花村氏についてのレクチャーをうけた。聞けば聞くほど謎が深まる。一応みんなでない知恵を絞って質問事項をまとめておいた。最大の謎は花村氏にとってのアイデンティティー。あと数十分で到着という時になって初めて、花村氏に私たちの来訪が伝えられていないという事を知った。20年近く山を下りていないという花村氏。「もしかしたら既に……」という不安を抱えたまま彼のもとへといく。

彼はやはり謎の人だった。実際お会いしてみてもそう思う。夜ビール持参で話を伺いにいったが、そこでもやはり謎だらけ。隊長・片平の健闘も虚しく、一番聞きたいことが聞き出せない。あんなに孤軍奮闘な片平を見ることはもうないであろう。「花村さんの好きなことばはなんですか？」「スペイン語」「座右の銘は？」「どんなメイ？」そんな彼の前に私たちは、ただただ無力だった。

後日私たちが歩いたルートが観光地化するかもしれないという話を聞いた。できれば観光地化などせずに、あのままの自然を残して欲しいと思う。植生の変化や気候の変化など、同じ山でも高度によって全く趣がことなっていた。ガリンド大使の気まぐれにより、嫌々行くことになったインカトレッキングだが、4日間という短い期間の割には非常に内容の濃いもので、その後行ったどんな観光地よりも一番行って良かったと思える。それはボリビアの人と自然の素朴さを体感できたからではないだろうか。それは私の中であんなに苦しんだ高山病の辛さをも打ち消してしまった。現代の日本が何処かで失った時間の流れを、あの場所では確かに感じることができた。

▲トレッキング中に出会ったリャマ



マードレ・デ・ディオス川下り報告

マードレ・デ・ディオス川下り

目的：100 年前の移民の足跡を辿りつつ、川筋に住む日系人の方々と交流する。また、アマゾン川の支流にあたるこの川で、大自然に触れる。

装備：駐日ボリビア大使同行などの諸事情により、軍隊のエンジン付きの船が伴走してくれた。水上で使わない荷物は全て軍の船の上に置き、軽装で今回の計画に望んだ。常時携帯していたものと、陸上で使ったものと分けて記しておきたい。

携帯品：GPS・トランシーバー・レスキューロープ・ライフジャケット・コンパス・ホイッスル・防水パック・メガネ紐・リバーナイフ・虫除けスプレー・かゆみどめ・医療パック・カメラ・モスキートネット・ライター・タオル・トイレットペーパー・フィールドノート・ポリタン・地図

陸上装備：テント・テントマット・火器・ザック・カヌーリペアセット・蚊帳・浄水機・食糧・水

メンバー：メンバー表参照

行程記録：日程表に概略が記されているので参照していただきたい。8 月 14 日に出発予定だったのだが、スールという南極から吹いてくる強風により、翌日の 15 日に出発が延期となる。このスールは、乾季の間に数度吹くのだそうが、今年いちばんのスールにあたってしまう。強風の上に、気温も下がる。それまでは半袖で汗をかいていたが、スールが吹いている間、夜などはフリースを出さないと耐えられないくらいだった。緯度的には赤道に近いというのに南極の風がここまでやってくるとは、正直驚きであった。翌 15 日には風も多少おさまり出発となるが、進行方向から吹く逆風を受け、また風を受け波立つ水面に翻弄されつつカヌーを漕ぐ。カヌーはアーリー社のカナディアンタイプ。装備の人間に話を聞くと、安定性と積載量、折りたためるという利便性を買ったという。確かに喫水が深く、非常に安定性のよいカヌーではあったが、推進力に少々欠け、逆風の煽りを受け初日から難渋した。だが、日をおうにつれ風は治まり、隊自体がペースをつかみ出すと平均時速 8km をマークする。当初の計画では、1 日で 6 時間行動の 30km を目標にしていた。ようするに平均時速 5 km で計算していたことになる。概して、机上の計算と現場の数字は差が出てくるものである。我々は 30km を基準とするのではなく、6 時間行動を基準にして行動することに決め、ゴールのリベラルタを目指すことにした。ただ、こうなると単純計算で一日 48km 進むことになるが、現実は 6 時間の中にレストを挟みながら動いたので、1 日に約４０km ペースで行動した。

翌日の 16 日の夕方にはペルーとボリビアの国境の町、ヒースにつく。ここでは軍の施設

を使わせてもらい、１９日まで滞在する。この間に支流探査を行い、野鳥、ヘビ、ワニの姿などを見る。支流の上流域にエコボリビアという宿泊施設があった。最近完成したそうで，ホテルとして建設したとのことだった。ただ，場所的にはヒースからエンジン付の小型ボートで遡上すること約４時間かかる。果たしてそのような辺鄙な所に人が来るものかと疑問に思ったが，ゆくゆくはヘリポートを作り高級ホテルとして売り出すらしい。私たちは幸運なことにそのホテルの記念すべき宿泊客第一号だったらしく，非常に歓迎してもらった。確かに「高級ホテルに」と言うだけのことはあり，建物の作り，サービス，食事どれをとっても自然と融合した良い雰囲気を醸し出していた。建物は木造の高床式。食事は新鮮な鶏肉，卵をベースにしたもの。照明も必要以上に明るくなく，間接照明を主にして明かりをとるという感じであった。ただ，あの立地条件を選んだことについてはいまだに謎であるが。

19 日にヒースを出発し，18km 下流のチーベというところに着く。ここでは，サンファン移住地の方々が，陸路 3000km を車でとばし応援に駆けつけてくださる。そこでは盛大なバーベキュウが催され，私たちの労をねぎらっていただいた。頭が下がる思いである。サンファンの方々はその後も魚釣りをしながら，私たちと同じ位のペースでリベラルタまで下ったらしい。というのもテント場が同じになったことがなかったため，水上で姿を拝見することはあっても，時間の流れが緩慢になる夜のひとときを共に過ごせなかったのである。 ただ，アマゾン川流域に生息する淡水魚を刺身にし，醤油とワサビを差し入れていただいたときの喜びは，隊員一同，忘れがたいものとなった。また日本の淡水魚のイメージというと泥臭さを払拭できないが、ご馳走していただいた刺身は，川魚特有の臭みというものは，ほとんど感じられなかった。ちなみに川自体は，お世辞にも綺麗だとは言えない。というよりも日本のどこの川よりも見た目は汚いであろう。透明度はほとんどなく，泥に茶色く濁り，川筋の街からの排水は下水処理されないまま垂れ流されている。少々汚い話になって恐縮だが，川をカヌーで下っていると川面に盛りがった泡の固まりを無数に見た。現地で働く海軍の少年に「あれは，なんだ」と言うようなことを聞いてみたところ，意味ありげな含み笑いを浮かべながら「トイレから来た」というではないか。要するに米が異なったもの。有り体にいうと糞なのである。しかし，だからといって魚が不味くなるわけでもなく，差し入れてくださった刺し身を、私たちは殺気交じりの和気藹々とした雰囲気の中、先を争って箸を伸ばした。また、私たちは，変わり果てた大便の残骸を横目でやり過ごしながら，無邪気に川遊びに興じたものである。実際，大汗をかいて一日の行程を終えるとそのような状態の川でも身を浸し，涼をとりたくなる。また石鹸をつけて体を洗えば，さっぱりして気持ちよく熟睡できたものだ。日本のどぶ川でそのようなことをすれば，狂気の沙汰なのだろうが，人間の適応力と自然の雄大さは，得も言われぬ魔力を持つのである。ただ，生活排水の問題からもわかるように，現地の人々は環境問題というものへの意識は希薄なようである。いままで環境を破壊しながら経済を発展させ，暮らしの豊かさを追求してきた我々が，余裕が出できたからと言って，これから発展しようという

国に環境問題のモラルを問うというのも，身勝手な話ではあると思うが，それでも自然の魔力は無限ではないということを知って欲しいと感じたのも事実である。

8 月 20 日チーベ発。ここで室が体調不良のため，検査を受けに近くの街まで行くことになる。近くといっても検査ができるだけの設備を持つ病院がある街へ行くにもチーベから陸路で４時間ほどかかる。ここでも国本教授はじめ，日系人，また現地の方々には格別のが配慮をたまわり，お礼の言葉もない。幸い室の体には、脱隊などという、差し迫った異常があるわけでもなく、翌 21 日の夜には隊に戻ることができた。

8 月 25 日，中間地点でもあり昔（現在でもディオス川の川筋では有数の規模の街である）水上交通の要所ともなっていた セナに到着する。ここでは街を挙げて歓迎をしてもらう。晩餐会で小学校の子ども達の踊りや，歌を披露していただく。この旅を通して言えることなのだが，地球の反対側の島国から来た一介の学生達に，日系人はもちろん現地の方々まで非常に歓迎していただいた。一同感激すると共に「ハポネス」という民族をここまで許容してもらえたというのは，現在の日本政府の支援，努力もさることながら 100 年間の年月の中で、日系人の方々がボリビアで積み上げてきた「ハポネス」または「ニッケイ」という信頼の上に成り立っているような気がした。

8 月 26 日セナを出発するが，今回の行程中を通して体調の芳しくなかった高橋が，カヌーの上で倒れ，水の中に落ちてしまうという事件が起こる。幸いライフジャケットをしっかりと身についけていたらしく，大事には至らなかったのだが，体力の限界と感染症の疑いのため，一足先にゴールであるリベラルタで療養することになる。この後彼女は，検査や治療のためほとんど隊と行動を別にしてしまう。ただ，命に関わるようなことが無く，不幸中の幸いだったと言えよう。彼女だけではなくセナをすぎた辺りから，一同に疲労の色が濃くなってくる。気温にして 30 度オーバー。川の上には日差しを遮るものがないので体感気温は 40 度ちかくまであったのではないだろうか。その中でのカヌーの操船である。否が応でも疲れは蓄積されていく。もちろん我々もある程度の疲労への自覚があったので，日中最もあつい正午前後を昼休みに当て，熱射病，日射病の予防対策をしいた。それでも亜熱帯の太陽は私たちの体力を削っていった。28 日に高橋に引き続き，大矢がカヌーの上でダウンしてしまう。彼女は熱射病だったらしい。付き添っていてくれていたイボ医師は，高橋と同様に大事をとって彼女をリベラルタに戻したがったが，ゴールまで対した距離ではないのと，本人の強固な意志のため彼女は，そのまま行動を共にすることになる。

そして，8 月 31 日。ペルーのプエルト・マルドナードを出てから 17 日目ゴールのリベラルタに無事着くことができる。リベラルタではゴール地点の川縁に人壁ができ，花火があがり，盛大に歓迎式典を催してくれた。その多くに日系人の方が参加してくださったのも我々にとっては非常に嬉しいことであった。皆，顔には達成感と心地よい疲労が見られ，盛大な歓迎式典を前にして，感動がわき上がってきたのを、今でもありありと思い浮かべることができる。

あのとき口の中でアドレナリンの味が、した。

四方山話：川下りにおける印象深い出来事の１つに，野生のフラミンゴを見ることができたということが挙げられるであろう。ジャングルといえども乾期と言うことが影響してか，風景はさほど色合い豊かなものではなかった。その中でフラミンゴのピンクというものは違和感を禁じ得ないほど艶やかだった。実際ある隊員の行動記録の中には，フラミンゴの感想がこのようにつづられている。『自然の中から何故あのような色が生まれてくるのであろうか』。その光景に居合わせた人間からすると非常に的確な表現のような気がする。それほど自然の中のフラミンゴの桃色は鮮やかに私たちの目に映った。

生物といえば，忘れてはいけない話が一つある。魚の話だ。私たちは，現地に行くまで，アマゾン流域にはピラニアがわんさかいて，水に落ちようものなら手足の一本は覚悟しなければと思っていた。しかし，実際のところピラニアはあまり人などの大型動物を襲うことはないそうである。なぜか。エサが豊富なのである。別段大型の陸上生物が誤って水に落ちてくるのを待たなくとも，十分にエサにありつけるのだ。私たちも水浴び，水遊びの類はすべて聖母川，マードレ・デ・ディオス川で行ったものの，誰一人として，手足が無くなったものはいない。ただ，凶暴な魚はいなかったが，非常にユーモアのある魚が多くいて，私たちを苦笑させてくれた。私たちにとってディオス川の水は，ほとんど透明度がないように見えるが水生生物にとっては生活の場。水が濁っていても見えるものは見えるらしい。私たちが水にはいるとき，男性諸君は，上半身裸になりオス河童化する。すると好奇心おおせいな彼らはどうも私たちの乳首が気になるらしい。エサに見えるのかどうか知らないが，遠慮なく食いついてくる。幸い彼らはかわいい口と歯しか持っていないようで，乳首の先が紛失するということはなかったが，これはかなり度肝を抜かれる。大抵一度水の中にはいると，どこかで「わあ」だの「ひゃあ」だの「おふん」などの怪しい奇声が飛び交うことになる。しかしあるときひときわ大きい奇声が一同の耳を襲った。一瞬，乳首を遺失物係に探しに行かなくてはという思いが頭をよぎる。次の瞬間「両方いっぺんにやられた」。なんというニヒリズム。なんという無邪気さ。一同腹を抱えて笑った。ただ今思うとピラニアが好奇心のあまりない魚だったことに胸を撫で下ろす次第である。

▲水浴び

アマゾンの「カ」

本多　肇

川下りにおいて。とにもかくにも、皆が一番悩み、イラつき、嫌だったのは、蚊である。帰ってきて、いろいろな人からの質問で、「一番苦しかったのは何？」と聞かれ、全員一致で蚊を挙げる。全員同じこと言っても面白くないだろうと思い、何か他のことを言おうと考えるも、どうしても一言蚊のことを言い添えておきたくなる。川下りにおいての最大の難敵、蚊について述べてみよう。

もっと正確に言うと、蚊ではなく、ブヨである。アマゾンにいるのは、日本の蚊よりもっと大きくてごついやつ、と想像されそうだが、私たちが出会ったものは、体長 1．5mm 程の、ブヨといったほうがいいやつであった。日本のヤブ蚊に似たものもいたが、川の後半の方に登場し、不快感においてはそのブヨに劣る。もちろん川においては全ての蚊が不快だったが、ここではとくにひどく、特徴的なそのブヨを、以下「カ」とし、日本のヤブ蚊に似たものを「蚊」として、具体的に日本の蚊と何が違い、どう、より嫌だったのかを細かに分析してみよう。

まず何よりも、「カ」の数の多さである。肌が露出した部分はことごとく刺され、治るのを待たず次々に刺される。用足し時に露出すればきちんとそこも刺される。ちなみに、尻を刺されると、座ってカヌーを漕ぐためにこすれて、また川の上だから濡れやすいということでふやけて、どうにも嫌な感じである。出発前から、ある程度予想はしていたことだった。「アマゾンは蚊が多い。虫よけスプレー、蚊取り線香、虫ささされ薬、蚊帳などたくさん用意しよう。」私自身は、個人装備で虫よけスプレーを３本用意した。しかし、現地では、あまりの蚊の多さに量を使い、残り少なくなったスプレーを惜しみながらも、蚊憎さに倹約を忘れる、というはめにおちいった。

そして、「蚊」と比べて「カ」への嫌悪性をより高くしているのが、その喰い跡の様である。「蚊」に刺されると、人により違うが、まあそこそこ直径 1．5mm 程に赤く丸く腫れ、かゆくなる。「カ」に刺されると、刺された所は、小さい、ちょうど「カ」と同じ位の、赤く、固い点になる。‘赤’色は「蚊」のときのほの赤く血色づく赤ではなく、もっと生（なま）な、血だまりといったような、血がポツンとたまって、それを皮フごしに見るといった感じである。実際、その跡が治るとき、血まめのように赤紫になって消えていく。そして、その跡は「蚊」よりもう少しかゆい。（気がする。）それに加え、私の見解では、たぶん川下りで砂浜にテントを張らざるを得ないことによって、どうしても身体や衣服に砂がつくことが、かゆみ、というよりも「不快感」を１，２倍くらい増すと思う。「カ」の跡はそんなに腫れはしない。しかしそれも、一点集中的に腫れないというだけのことで、数刺されて、腕回り、首回りが少し太くなっている隊員もいた。跡が消えてなくなるまでの期間だが、旅の疲れ、食事などの慣れない生活習慣、大量の「カ」の毒に対する体の免疫機能の低下など、諸々の副

次的要素の存在もあったが、帰国して２ヶ月が経とうとする今も消えないで残っている隊員がいる。

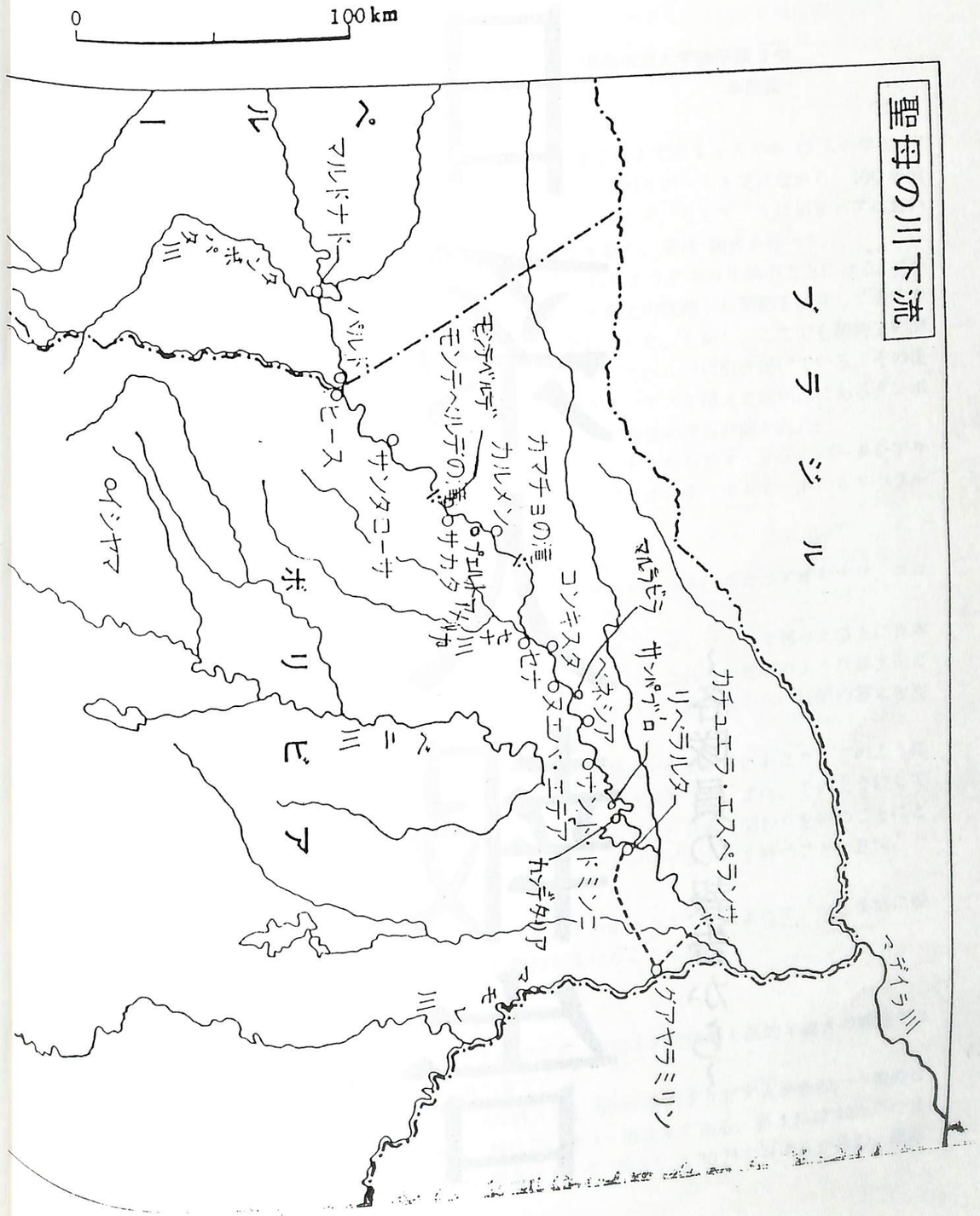
さらに「カ」は、「蚊」よりも素早い。その膨大な数と、残忍な喰い跡に怒り、イラつき、目前のわが腕に巣食う「カ」をひっ潰そうとも、そのまま感情に任せた気配ミエミエの荒い素振りではヤツらを捕らえられない。内心怒りに燃えながらも、冷静に静まり、何も気に留めたフリを見せず、周到に、位置、角度、タイミングを見定め、正確にかつ素早く腕を振るうことでのみ、アッシさせることができる。

不思議だったのは、これ程「カ」に悩まされる川下りの間、私たち日本人は「カ」に刺されないよういつも暑いなか長袖を着用していたのに、軍のボリビアーノたちはそんな私たちの横で、平気でＴシャツ、短パンで過ごしていたことである。彼らは、刺されていることは刺されているのだが、私たちに比べて圧倒的に数が少ない。「カ」がとまってもさして気にする風でもなく、時折手をパタパタやる程度である。カタコトのスペイン語で聞いたところによると、この地域にずっといるから、子供のときからいるからだ、ということらしい。もう免疫ができあがっているということなのであろう。

快適そうなボリビアーノを羨みながら、たぶん皆が一回は志したのが、「もう気にしないことにする」という、いわゆる無我の境地である。誰しも、かゆかったり痛かったりどうにも気になっていた所が、何か他のこと、例えばスポーツなどに夢中になっている時はぜんぜん気にならなくなっていたという経験があるだろう。後になって思い出して、ああそういえばさっきは何ともなかったなあと気付く。それと同じような境地に達するべく、半分意識的に「カ」に関する、かゆみやらイラだちやらを頭の中から追い払うわけである。「心頭滅却すれば…」である。

まあ、そんなことで平気になるんだったら苦労しない。結果はいうまでもないが、むしろ気にしないのをいいことに余計刺されたりする。「…すれど「カ」はまだ痒し」。はかなく挫折した後も、絶え間なく「カ」はやってくる。私たちの思惑、どうにか耐えていこうという努力、ああその健気さ、などには、全く、全く無関心に無関係に、ただ「カ」としての営みを続けていくだけの「カ」。それは、「カ」よりもむしろ大自然の営みというヤツである。大いなる大自然。人間の思惑なんぞ大自然のちからの前にはなにほどのものでもない。自然のちからって偉大だよなあ。

アマゾンの「カ」は、偉大なアマゾンの「カ」であった。


0
100 km
豊田の三下流
ブラジル
ボリビア
マルドナド
パルド
ピース
カマチョの滝
カルメン
モンテベルデ
モンテベルデの滝
キンタコーチ
インヤマ
ロンキスタ
ペドロ
ペドロ
ペドロ

日系人報告

～各隊員の報告から～

日系人概要

横浜市立大学商学部３年
本間俊一

我々は、1999 年８月３日から９月 17 日に解散するまでの１ヶ月半を 12 人の学生、2 人の社会人と、他にガリンド大使をはじめ多くの方々のサポートを受けながら、100 年前の日本人のペルー・ボリビアへの想いをたどる旅行をした。そして、主にボリビアにおいて、日系人社会を形成する地域と、日本人移住地を訪ね、交流･調査を行った。

ペルー･ボリビアへの最初の移民は 1899 年今からちょうど 100 年前のことになる。ペルーのサトウキビ耕地における出稼ぎ移民 91 名が労働上の問題から契約を破棄してチチカカ湖を渡り、ボリビアのラパス州ソラタのゴム林に入った。しかし、ここでも契約上の問題があり、翌年までに１～２名を残してその他はすべてペルーに引き揚げている。その後ボリビアへの移民は一時途絶えるが､1907 年になりアンデスを越えた低地部にあるタンボパータ地区のゴム林移民の進出によって再びボリビア移住の窓口が開かれた。

後者は、アンデスを徒歩で越えタンボパタに出て、そこからリオ・タンボパータを下りマルドナードに出て、そこから更にマードレ・デ・ディオスをマルドナードからリベラルタに出るルートを、16 日間かけてカヌーで下った。

川の途中の小さな村落では、日系人の姿もあった。

カヌーの行程を終えた後、我々はリベラルタ、サンタクルス、コロニアオキナワ、コロニアサンファンに滞在し、日系人社会を訪ねた。

私は、日本人移住地であるコロニアオキナワとコロニアサンファンで思った以上に日本文化を守って生活していることに興味を感じた。それは、これらの地域のような異文化どうしが融合して行く途中の段階の地域を見ることによって、旅の前からの疑問の答えを知ることができるかもしれないと感じたからである。

旅の前からの疑問とは、文化も環境も全く異なる地域で生活するにあたり、どのようにして快適に暮らせるよう地域に順応・変化して行くのであろうか。また、そのようにして順応した日系人が、日本語や日本文化をほとんど知らずに、日本と関わりを持つことにどのような意味があるのだろうか。日系人としてのアイデンティティを持つことの意味。といったことである。

両コロニアでのインタビューや、サンファンでのホームステイによって、少し生活に触れてみて感じたことなどをもとに、この報告を進めることにする。

移住地概況「コロニアオキナワ」

1945 年に「うるま」という名称で入植するが、原因不明の熱病と法的手続きの問題で２度移転して、1956 年に現在の地に落ち着く。

現在は、820 名、220 戸の日本人（日系人）と 5000 名のボリビア人が住む。一世の日本人の内９５％は沖縄出身者である。移住地は第 1～第３まである。第１には 130 戸の日本人とほとんどのボリビア人が住む。第２は 60 戸、第３には 30 戸の日本人が住む。総面

積５万７千ヘクタールで、日本人は平均一人 350 ヘクタールの農地を持つ、ボリビアでも屈指の農業地帯である。日本語を教える日系人学校が、第１移住地と第２移住地に二つあり、日系人の子供は全てそこに通っている。この地域から約 250 名が出稼ぎのため日本にいる。

「コロニアサンファン」

この地域への最初の移住は西川利通さんを団長とした移民である。西川移民が先例となり日本ボリビア間で移住協定締結が 1956 年に行われ、1957 年第１次移民が入植した。現在 80０人の日本人と 7000 人のボリビア人が住み、日本人の約半数は長崎県出身者である。リオ・ヤパカニの近くの 12 キロの道にコロニアの中心、農協・診療所・日本ボリビア協会の事務所がある。また日系人学校もある。

生活習慣を見ての感想

サンファンでホームステイした時は、まるで日本にいるようだった。醤油や味噌などの日本の調味料や食材が容易に手に入るため、普通に日本色を食べる。家族では日本語を話し、テレビではＮＨＫが各家庭で衛星放送を使い見ることができる。出稼ぎに行っている人々から日本の本や新聞、テレビ番組を撮ったビデオなど、いろいろのものが送られてくる。サンファンでは日本の本とビデオを貸し出す図書館があった。そのため日本の情報は十分に知ることができる。

日系人家族のほとんどは、ボリビア社会のなかでも中流階級以上である。家電製品は日本の一般家庭と同じようにそろっている。多くの家庭では広い農地を持っていて、ボリビア人を雇って農業を経営している。農業は収入の波が大きいそうである。好作の年には収入は相当なものになるらしく、車を新車に買い換える人が増えるそうだ。

サンファンに電気が通ったのは 20 年ほど前らしく、電気が通ってから生活が一変した。生活は便利になったが、それに伴い電化製品や電気代などのお金がかかるようになった。昔とどちらの生活が幸せかなと苦笑いをしていた。

2 世の人たちは、日本人や日系人と結婚する人が多い。年配の方々の中には、ボリビア人と結婚することを好ましく思っていない人も結構いるようだが、日系人幼稚園を見学した時は、ボリビア人のお母さんの姿も目立った。

とにかく少し滞在した限りでは、日本にいるような感覚すら覚えた。少し違和感を覚えたのは、家の中で靴を履いていることと、お手伝いさんが大勢いて、家事などをやってもらえることぐらいである。にもかかわらず日系人の子供でも、自分はボリビア人と答える方が圧倒的に多い。（サンファンの日系人小学校で 6 年生の生徒に「日本人であるか。ボリビア人であるか」という質問をした時、一人を除いて全員が自分は日系ボリビア人であると答えている）のは、教育、文化、言葉などあらゆる面で、すでにボリビアとつながっているということではないだろうか。ここでの 2 世たちは、自然に日本とボリビアの両面の文化を併せ持ち、時にはその間で悩むこともあるが、また双方の文化を理解する力を持っているようである。その文化のつながりに焦点を絞ると、より疑問の答えが見えてくるはずである。

日系人の現在

横浜市立大学商学部３年
中村淳一

戦前移民について

混血がすすんでいて見た目では日系人と判別し難い。加えて日本語も話せる人はもっと少なくなる。リベラルタは 100 年前の移民が数多く移住しており、日系人は多くいたが、３世４世ともなると混血が進んでおり、日本語教育も受けていないようで現地化していた。日本人協会は 100 年祭をきっかけに活性化したといっており、今後日本語教室も開かれるらしい。日系人の暮らしぶりは結構いい方だと思う。子供たちもみな学校に行けるようだしボリビアでは小学校にも２部があり、小さいころに働いているような子供は大きくなってから２部で勉強することもあるようだ。また途中の川筋に住んでいる人々は益々現地化がすすんでいて自分が日系人であるという意識はほとんどないようである。生活水準も現地の人々と同じくらいだろう。また川筋のボリビア人教師は日本自体を知らなかった。

戦後移民について

戦後移民の中でもサンファンとオキナワコロニアは、日本人の集まりだ。この移住者たちはジャングルを切り拓き、広大な農地を作り、生活している。日本政府からも援助を受けているので生活水準は高い。あまり混血も進んでおらず日本語教育もしっかりしていて日本人と余り違いはないが、2 世の中ではボリビア人であるという意識が強いようだ。中央大学の南米研究を専門になされている国本教授にお聞きしたところによると、サンファンでは昔の日本社会がそのまま残っているそうである。この時間の止まってしまった特有の日本と、現在の日本がどのような関係を作っていくかというのが、これからの一つの課題であることは間違いないであろう。

日系人について

横浜市立大学国際文化学部３年
門間奈々

何をもって日系人と定義できるのか。これがボリビアを訪問して抱いた疑問である。

日本人移住者たちが、ボリビアへ渡航した地域、時期により、その子孫がおかれている現在の状況（環境）は実に異なったものであった。リベラルタで出会った日系３世４世は全くといってよいほど日本語能力がないのに対して、サンファンで出会った20代の若者達（３世）は皆２年から３年程の日本への渡航経験（主に就労）があるということも、この事を端的に示している。ある時リベラルタで、現地の女性が日本語で書かれた一通の手紙を提示してきた。一介の旅行者である私たちに対し「どうやったら自分が日本人の血を引くものだと証明できるか。この祖父の手紙で証明したい」と尋ねてきたのである。生まれも育ちもボリビアで全く日本の事を知らない彼女が、なぜ日本人の子孫である証明を必要としているのか、この時私には理解できなかった。このような事例に出会うにつれ、彼女のような日系人たちは現地社会で日系ボリビア人としてのアイデンティティを確立するため自分のルーツを私たちに求めていたのではないかと思い至った。

また純粋に日本で生まれ育ち10代で渡航した日本人移住者も渡航年月が長期におよぶほどボリビア人としての意識が高くなる。彼らもまたある種日系人として定義できるのではないだろうか。度重なる混血の結果、現在では日本人の面影を残していないリベラルタ在住の日系人も、衛星放送でリアルタイムに日本語のニュースを見、食卓に豆腐が並ぶサンファンでも、日本人の血が流れているという事実を認識する事で、日系ボリビア人という一見危ういような自我もインディオ、日本系、スペイン系等実に多様な混血を繰り返し続けている。ボリビア社会で確固としたものになっている。

これから先日系人たちがどのような存在になっていくのかはわからないが、100年後、200年後もボリビア社会の中で活躍して欲しいと願う。

日系人の特異な例をひとつ

横浜市立大学商学部３年
小山久美子

ボリビアに日本人が移住してから100年目を向かえます。その100年という数字の中には、現在日本にすんでいる私たちには想像もできないような数々のドラマがあったことでしょう。100年という年月が過ぎてしまった今では、私たちが知ることのできる当時の様子というのは、やはりボリビアへ行き、実際にボリビアに移住した人々やまたその子供たちに直接会う事によって、ほんの一部でははあるかもしれないけれど日系人というものを知ることができるでしょう。だから私たちはボリビア日本移民100周年記念マードレ・デ・ディオス川追跡調査探検隊というものを結成し、計り知れない数多くの方々に大変なご協力やご指導、ご支援を頂きながら、100年前の日本人の足跡を辿ったのです。そして実際に、今、ボリビア国内に住んでいる多くの日系人の方々にお世話になりながら交流をしていくうちに、ボリビア日本人移民のドラマをたくさん知ることができました。また、一口にボリビア日本人移民と言っても、同じ日本に住む日本人といえど、また横浜市に住む日本人でさえ千差万別な暮らしぶりや考え方、価値観を持っているように、一概に一つのカテゴリーで括る事はできないとうことも実感しました。21世紀までカウントダウンがすでにはじまっている地球上の、そしてボリビアという国で現在生きている日系人たち。その日系人たちが１００年間という時をかけてつくってきた日系人社会と、そこで生計を立てるという事など、日本に住む私たちは、彼らの歴史的諸事実を知り、そこから学び、次の世紀に生かしていくべきではないかと思いました。

アンデス山脈の山奥で生活している花村氏という人物。彼はボリビアへ来てからしばらくし、とあるアンデスの山中に住みついた人であります。出身地の長野の気候に似ていたから住み易いと感じたそうですが、そうはいっても山の中で一人、ゼロから暮らしというものを作り上げました。現在、花村氏はアンデス山脈のインカトレッキングをする旅行者のために、キャンプ場を整備しています。そのため、旅行者たちは無料で、そのよく整備されたキャンプ場にテントを張ることができます。花村氏のキャンプ場周辺は、山中ということもあって大変平地の少ないところです。ですから、花村氏によって作られたキャンプ場というのは、旅行者にとって非常にありがたいものなのです。それなのに無料で貸しているというところに花村氏の人柄なるものが出ていると思います。また花村氏は幼い頃から世界地図を見ることが好きだったそうですが、そこから自然と湧いてくる世界への興味。これが、キャンプ場を作るという形で、インカ道トレッキングをしにやってくる世界中の人々に会えるという夢がかなっ

たといっていました。花村氏の家の前には、今でこそ旅行者向けの売店のようなものがあり水や簡単な食料が売られていますが、花村氏が山へ入った当時は、一人何もない山の中でまさに隠者のような生活であったと他の日系人の人がいっていました。また花村氏のことを「落ちぶれた日系人」と称するボリビア日系人移民の方もいたりと、花村氏に対する日系人の中の評価は様々あるようです。この花村氏のような生活をしている日系人は確かに少数派であります。多くの日系人はほとんど日本の生活と変わらない、また時にはそれ以上の生活水準の中で暮らしています。しかし、少数派といえ花村氏のように山の中で隠者のような生活を送っている人々のことは、ボリビアという国に多大な期待や不安を持ちながらやってきた日系人の中からどうしてこのような生活を選択するに至ったのでしょう。個人的に興味があるため、貴重なケースとして見ていました。

私は以前、次のような本の中の一説に目がとまりました。花村氏の現状というのもこのように理解できるのではないかと思います。「人間は本来怠け者、横着者なのだ。第一、文明というものは物質的な豊かさのためでもある。必要は発明の母というが、怠惰は発明の父といってもいいのではないか。私たちの社会では楽をしたいために、先人が頭を振り絞って努力してきた。それなのに手段であったはずの労働だけがいつのまにか目的となり、それが美徳になってしまった」(『ぐうたら原始行』関野吉晴 1974) 下界に降りて働けばどんな可能性だってありうる、その可能性がまだ残っているボリビアで、山の中の生活を選択した人々、その中でも私が直接会った花村氏はある意味でボリビアに渡った日本人移民を学ぶ上で時には大変貴重な人物であると思いました。

▲日本人移住者　花村民次さん（左から3人目）

日系人とのコミュニケーション

拓殖大学外国語学部４年
多田真由美

「死んだ気になって見られるモンすべて見てこい」
そんな少し大袈裟な父の命令を忠実に守った私は、全行程を通して体調を崩すことなく、ボリビアの変化に富んだ自然を満喫し、様々な面を見ることが出来た。民族衣装に身を包んだインディオ、３泊４日のインカトレッキングでの高山病や植生の変化と満天の星空、600ｋｍを二週間かけて下ったマドレ･デ･ディオス川での灼熱地獄と蚊やブヨとの戦い、温かく迎えて下さった現地の日系人や日本人の皆さん。8月2日から約1ヶ月半のボリビア滞在は私の人生の中で最も価値ある充実した日々であったことは間違いない。

移民の足跡を辿ることが目的の１つだった今回の探検において、中でもオキナワ地区とサンファン地区の日本人の方々と知り合い、交流ができたことは私なりの探検の成果だと思う。

川下りのゴールであるリベラルタやグアヤラメリンでであった日系人は1世を除いて、多くの方が混血していて日本語を話すのは一部の人だけだった。「私はニッケイで日本人の名字を持っている」といわれても何か大きな隔たりを感じたし、言語が違うので意思疎通に苦労した。100年前に日本の裏側に位置するボリビアに移民した日本人の子孫が私たちと同じ言葉や生活様式を持っているとは考えにくかったのでこれこそが私の日系人のイメージそのものだった。

しかし、9月10日から14日まで訪問、滞在したオキナワ地区やサンファン地区が私のボリビアの日系人社会のイメージを大きく変えた。

タクシーで移住地の入り口に掲げてある日本語で書かれた看板を見た時、今まで見てきた日系人社会とは明らかに異なる雰囲気を感じた。その両地区には日本と変わらない社会が成り立っていて、日本人が日本語を話し、日本の文化を保ち、日本の情報も逐一知ることができ、日本にある物がほとんど手に入った。

サンファン地区で米倉さんのお宅に２晩お世話になった。生活は日本と同じだったが玄関で靴を脱ぐことはなかった。おじいさんから入植当時の移住地の様子や開拓で苦労した話を伺い、お父さんには街を案内していただき、お子さんには日本に対する考えを尋ねた。私の中で次々に質問や興味が湧いてあっという間に解決していった。はじめはなぜここまで日本の生活様式を取り入れるのか疑問だった。しかしお母さんの作る家庭料理をいただいて、味覚だけは一生ものだと実感し、久しぶりに湯船にゆっくりと浸かればこれほどのリラックス法はないと痛感して、日本人である以上変えられないものや、必要なものがあるのではないかと思った。そしてこの移住地が５０年前にはジャングルだった未開の土地で、約20年前まで電気も水道もガスもない土地だったとは今では想像もつかないが、日本人の生活を豊かにするために努力や苦労を厭わないそのパワーを感じずにはいられなかった。

名字は日本名だが混血がすすみスペイン語を話す日系人と二重国籍で日本人とボリビア

人の２つの性格を持ち合わせた日系人どちらの日系人とも知り合えて、交流できたことはとにかく嬉しい。今まで持っていた日系人についての意識や考えを改める事ができたと共に、日本人である私自身のことも深く考えさせられた。

そしてもう１つ、どの日系社会でも年配の方を大変敬い、大切にしていることに私は常に感心していた。今の生活の基礎を築いたのは誰の苦労のおかげなのかを思い直す良いきっかけにもなった。

▲リベルダで。我々のために前から練習してくれた「夕焼け小焼け」

日本人移住者の末裔を訪ねて

横浜市立大学商学部３年
片平吉秀

追跡調査探検の大きな目的の一つに、「100 年前の日本人移住者とその末裔に関する理解を深める」ということがある。100 年前に日本人移住者がたどったルートの再現、また現在生存している方々との交流、これら二つの方法によって私たちは「日系を知る」という目的を達成しようと考えていた。そしてその成果の一つとして、日系人を「日本の意識」という視点から紹介したいと思う。

本格的な日系人紹介の前に、ボリビア日系人のどこに焦点を当てるのか説明しよう。というのも、ボリビア日系人は多種多様なアイデンティティを持ち、それを１つの範疇として語るのは不可能だからである。例えば戦後と戦前の日系人は、日本への意識もまったく違うし、生計の立て方も違う、さらには家族の概念から食生活も、何から何まで違うことが多すぎる。これはほんの１例である。その他にも年代別、地域別に価値観が異なっていて、その上に個人の経歴がさらに多様化を促している。

このような理由により、対象をセグメントする必要がある。すべての日系人を語るには、紙面の都合と私の力量に大きな問題があるので、今回の私たちの川下りルートと関係が深いリベラルタの日系人について紹介したいと思う。

さて、ようやく本題に入る。リベラルタの日系人が持つ日本への意識というものを世代別に紹介したいと思う。

1 世の世代

リベラルタへの日本人移住者は主に戦前の移住者である。彼らはペルー国内にてアリコマ峠を通ってマルドナドへ移動し、マードレ･デ･ディオス川を下ってリベラルタへ入った。当時のゴムブームに乗って、一攫千金を夢見て奥地へ分け入ったのである。

彼らは日本人であるということに強い誇りを持ちつつも、生きるために現地の社会へ積極的に同化していった。

1 世の強い日本人意識を現す文献があるので引用する。1 世移住者である新垣庸英氏は、志半ばで倒れた日本人移住者の墓を前にして、どのように思ったのかを日記の中で記している。「眠れる友よ冥せよ。汝の骨はこの雪の中に朽ちても、汝の進取の気性に実ある霊は、永久に止まり後進の同胞を激励し、汝の憧れたる森林地方の宝庫も、我が同胞によって開発せらるること難事にあらざればなり。」この分からは強い同胞意識があったかとうかがわれる。

2 世の世代

２世の世代になると、日本人意識は急速に消失してゆく。彼らは親が日本人でありなが

ら日本語がしゃべれず、現地化がかなり進んでいった。

たった１世代でここまで現地化が進んだ理由は２つある。第１に、彼らが生まれ育った時期において、日本の国際的地位が極度に低かったためである。彼らが育った時代はちょうど第２次世界大戦後である。彼らにとって、敗戦国日本の血がはいっているということは、到底誇りにはなり得なかったのである。第２に、彼らの母親がボリビア人であったためである。１世である日本人移住者はほとんど単身の男性であった。そのため必然的に結婚相手はボリビア人の女性である。子供にとって最も多く接する人間は、働きに出ている父親より、家庭に残って家事をする母親である。２世の多くは母親から、ボリビア人としての風習や価値観を受け継いだのである。

２世の世代は、１世である親達と決定的に価値観が違っていた。そのため世代間闘争が激化し、いざこざがあったりもした。極端な例でいうと、３等国である日本に対して嫌悪感すら持っていた者もいたという話もある。

３世の世代

３世になると日本への意識は一変する。日本に対し憧れのような感情を持つようになるのである。そのようになった原因は日本の経済成長であった。

豊かな国、日本。彼らの心には世界でまれな経済成長を遂げた日本が、眩しく映ったのではないだろうか。もちろん実利もあった。出稼ぎである。豊かな国日本に行けば大金が手に入れられる。そんな思いが彼らの中に住み着いたのである。また、他の地域の日系人に対する日本政府の援助も日本への憧れを高めた。リベラルタの移住者は正式な政府間の取り決めによる移住政策の結果の移住者ではない。そのため、直接的な日本政府の援助はでないのである。戦後の移住者たちが日本人であったということで援助を受けているということを見聞きし、いやがおうでも自分の中に流れる日本人の地を意識したのではないだろうか。

４世の世代

現在、彼らはティーンエイジャーである。まだ明確なアイデンティティなどは固まっていない。しかし私が彼らに会った感想は、日本人の血が中にあるということを明確に自覚している、ということだ。

以上の１世から４世までの紹介は、厳密な事実に沿っているとは言い難い。しかしこれが、私がボリビア国リベラルタを訪ね、彼らに会い、話を聞いて持った日系人像である。

１世の、日本人としての誇りと、現地社会に溶け込んで生き抜こうとする努力。２世の自らに流れる血に対する反発。３世の日本の豊かさへ対する憧れと利害。そして４世の中で、わずかではあるが確実にうごめく日本への意識。

これらには、自らのルーツと様々な時代の流れに翻弄される移住者たち姿がうつってい

る。大きな波にのまれながら、自分の中にある何かにすがろうとする。人間と世の中との関わりかたの、１面の真理がここにあるように感じる。

私にとって、このように強く感じられたことが、今回の追跡調査探検における１つの大きな成果であった。

▲リベラルタ。日本人移住者慰霊塔

ボリビアの日系社会をたずねて

中央大学３年
大矢明子

今回のボリビア日本人移民１００周年記念追跡調査探検で、いくつかの日系人社会を垣間見ることができた。コロニアオキナワ、サンフアンこの２つの移住地を訪れたときは、本当に驚いた。地球の裏側にある国、ボリビアにいるはずなのに、その風景、話されている言葉、食事、制度を見る限りまるで日本にいるようだったのだ。その裏には移住地を支える人々のたゆまぬ努力があることを知った。

多分、この２つの移住地について書く隊員が多いと勝手に予想して、わたしは川下りの終着地点リベラルタの日系社会について書こうと想う。

リベラルタには戦後移住者だけではなく、戦前移民の子孫の日系人たちが私たちを歓迎してくれた。日系３世、４世の若者たちはもう、言葉も考え方もそして顔立ちもほとんど日本人の面影を残すものはなかった。ただ、彼らの苗字に日本名が入っているだけだった。リベラルタの日ボ協会では近年その活動が活発になり、日系人の若者も自分たちの日本人の血を意識するようになったようだ。

「よく日本人と外国人の間の子息を“ハーフ”というでしょ、でもそうじゃない。２つの文化・考え方を知っている“ダブル”だと思うんだ。それだけ意識の幅が広がって、それだけチャンスも増える。そのチャンスの種を育てていかなくてはいけない。」

日系人に関してレクチャーをしてくれた協会事務局長である佐藤氏がそうおっしゃっていた。

語学教育・日本芸能・そして日本文化、考え方を教える授業をリベラルタの日ボ協会では行っている。将来新聞発行も目指していくそうだ。

今、苗字にしか日本の香りを残していない日系の若者たちも協会の活動に参加することによって“ダブル”としてリベラルタの発展に貢献していくようになる、そう私は確信した。戦後移住者の子息たちにも同様のことがいえるだろう。また、彼らの意見はボリビアだけでなく日本にとっても、貴重な役割を果たすと思う。

私自身も今回の旅に参加することによって、さまざまなことを考えさせられ、“ダブル”とまではいかないが意識の幅は確実に広がったと思う。日本を離れ、日本の生活とは違う生活をボリビア人とともにおくることで、何よりも自分の普段の生活を客観的に見つめることができた。

２ヶ月間ザックひとつで生活できた。日本ではいかに余計なものに囲まれてそれらに縛られていたのだろうか。また、移住者の人たちの苦労、多大な努力をしり、身の引き締まる思いがした。

ボリビアで蒔かれたこの種を、これからどう育てていくかが重要になっている。

日系人との出会い

横浜市立大学国際文化学部２年
本多　肇

今回、ボリビア日本人移民の100周年記念という形でボリビア、ペルーを旅してきた。この旅の計画が進む前には、私自身は、ボリビアという国の存在すらよく知らなかったし、ましてやその国に多くの日系の方が生活していることなど知るよしもなかった。だが、実際に現地を訪れて、私たちは、本当に驚くほどの盛大な歓迎を受けた。川下りの始まる前、現地入りしたリマ、ラパスから川下り終了後に訪れたサンタクルスに到るまで、たくさんの方が、地球の裏はるか日本からやってきた私たちを歓迎してくださった。

そのようにして、旅の中でたくさんの日系人の方とお会いしたわけだが、その中で考えたのは、「日系人」と呼ばれる者と「日本人」とのつながり、特に、日本文化を享受していない、現地文化に同化した「日系人」は、「日本人」である私たちと、どういうつながりを持つのかということである。それというのも、日系人といっても、いろいろなタイプの方がいる。日本で育った経験をもつ、移民１世の方、移民の子孫に当たり、ボリビアで育ち、日本を知らない方。後者の方は、言葉も通じず、日本文化に関する知識など全くない方もいる。実際川の途中で、自分は日系人だと名乗る方に何回か会ったが、日本人の面影も全然残っていないし、日本のことも全く知らない人たちばかりだった。私たちのカヌーを見てわざわざ会いに来て下さったのはすごく嬉しかったが、片言のスペイン語（カスティジャーノ語）で話せるのは一通りの挨拶くらいしかない。

川下りの到着地リベラルタでは、若い日系の学生たちとダンスをし、カラオケをし、川遊びをした。学生達は大いに盛り立て、歓迎してくれた。実際大いに楽しませてもらったが、やはり大した事が話せるわけでもなく、日系人ならではのこれといった特別な出会いをしたわけではない。（しかし、あくまでも楽しかった。）日本に帰ってきてしまえば、また会う機会などほとんどない。そんな中で、一体これらの出会いはなんなのだろう、ここで出会ったことがどういう意味を持つのだろう、と考えざるを得なかった。

今回の移民１００周年という事業に関しては、日系人という存在は無視できない。しかし、この「日系人」という言葉だが、上のような状況に出会ってみて考えてみると、この言葉に対して違和感を覚えてくる。「日系人」とは、「日本人の血を引く者」という意味であろう。「日本人の血を引く」、このことは確かに、まだ純粋な日本人である１世、の子、孫の代くらいまでは意味のある言葉かもしれない。顔つきなどの面影が残るだろうからだ。しかし、それ以後も続いて混血を重ねていけば、おそらく見た目では日系人だとはわからない。混血が進めば、その人が日系人だという事実は、単なる知識でしかなくなってしまう。日本の文化を多少なりとも受け継ぐ部分があれば話は別だが、単に「血を引いている」だ

けのことでは、ことさらに親近感が湧くわけでもない。逆に「日本人の血を引」いてなくても日本文化に共通の理解があるほうが、親しみは湧くだろう。血を引いているかどうかなどに大した意味はない、それなのになぜそのことを基準にして、同国系人でカテゴリー分けしようとするのか、というナショナリズムのような感じにちょっとした反感、違和感を覚えるのである。もちろん、「日系人」というカテゴリー分けは、単に血のつながりだけを考えて作られたものではないだろう。移民という、祖国を離れた、異国における少数者にとっては、「日系」というつながりで自助組織を作り、祖国からの支援をつくるほうが、都合がいいのは確かなのだ。実際、訪れたサンタクルスの戦後の日本人移住地ではＪＩＣＡの多分の援助を受けていた。確かにそういう側面もあるが、それだけでは物足りない。もっと、心情的な側面があっていい。

リベラルタを発った後、サンタクルスにある日本人の戦後移住の地を訪ねた。そこで、どうしようもなく体ごと喜びに震え、感動したものがあった。それは、移民 1 世にあたる方々が作ってくださった日本食、わさびじょうゆつきの刺身、麦茶、すし etc.である。日本を離れ、南米アマゾンという慣れない環境の中でしばらく生活した後、生まれてこの方しみついた感覚、特に味覚が故郷を思い出す時、その懐かしさの感覚は、他のなにものにも変えがたいものがあった。そして、それによって、「日系人」という言葉から連想された、「血のつながり」、ではイメージすることのできなかった、日本人同士の絆というものの一端を理解した気がした。

それは、文化に対する郷愁を共有し得る、ということである。移住者はボリビアに永住を決めている方がほとんどで、日本へ遊びには行っても、帰ることはない、住みたくはないと言う。しかし、移住地では今でもちゃんと日本食が食べられているし、日本の情報は積極的に集められている。最初、それに少し意外な気がしたが、その裏には先ほどの私と共通する、郷愁の感覚というものが根本的にはあるのだろうと思う。日本食の懐かしさは、日本食を食べて生活を営んできた者にしかわからない。逆に言えば、日本食を食べて生きていた者同士なら、日本食に対する懐かしさを共有できる。だから、同国系人同士の絆とは、一つに、同じ文化への郷愁を共有し得る、という意味なのだ。ナショナリズム的「日系人」への違和感も、そういう意味合いとして考えれば、解消される。

しかし、2 世以降の、現地で生まれ育ち、かつ現地の文化に同化してしまった者には同じことが言えない。「日系人」、日本人の血を引く者という言葉のカテゴリーに入りはするが、上の意味合いで必要な、文化の共有ができない。それでは、血というろくに実感も湧かない概念以外、彼らとの絆は皆無なのか。先ほどの問いになるが、あれほど盛大に歓迎してもらって、楽しく遊んだ、あの出会いは何だったのか。ただ、単に楽しく遊んだ、楽しかったに過ぎないのか。

ただ遊んだだけだ、といわれれば、本当にただそれだけかもしれない。何の絆、つながりが、といわれれば、その場限りでしかなくて、他に何の縁もない人たちかもしれない。しかし、少し見方を変えてみれば、それをそのまま、今言った、「縁」だということができ

はしまいか。もともと何の関わりもない、お互いの存在すら知らなかった者同士なのである。お互いが地球の反対側にいたのである。それが、出会い、何時間だかの時間を一緒に過ごした。多分、このことだけですごい縁なのだ。

リベラルタはボリビアの日系人の半数がいるといわれる街だが、私達が訪れる前は、日系人としての集まりはほとんど活動がなかったという。しかし、今回、私達のこの１００周年企画に合わせて、当地では日系人の間に呼びかけが起こり、改めて組織が整備し直されたという。それが、私達と一緒に遊んだ若い日系の学生達である。確かに、今回の旅で私達学生が直接関わった、現地の日系人との関係は、その場限りのもので、日本へ帰ってくればそれで終わりのものであったかもしれない。しかし、今回の企画が、彼ら日系の若者だけでなく、私達日本の大学生に与えたインパクトは、それが引いてはボリビアの日系社会、またそれと日本とのつながりへ大きな影響を与えることになる。実際にどのようにつながっていくか、果たしてどの程度の影響が期待できるかは分からないが、少なくとも大きな影響をつくる、きっかけになったとはいえるだろう。各国の日系社会が果たす、日本と当地国との国際友好への草の根大使的な役割は、様々な所で論じられている。今回の私達の触れ合いは将来の両国の友好へのきっかけになる、かもしれないのだ。

今回のきっかけを十分生かすために重要なのは、一つに、日本側からの、せっかく生まれた日系の集まり、それらの日系意識への働きかけだろう。政府、ＪＩＣＡからの働きかけはもちろんのこと、マスコミの果たす役割も大きい。草の根的には、直接現地を訪れた私達にできることは、いろいろありそうだ。そしてもう一つ、生まれ始めた日系グループへ、日本語や日本文化を学ぶことは、日本との友好への第一歩であると思う。今回の私たちのふれあいは、言葉も文化も何も共通するもののないところからのふれあいだった。けれど、もっとお互いに文化など共有できるものがあれば、さらに進んだ付き合いができると思う。

全てのボリビア日系人のご健闘ともに、ボリビア、日本、両国の新たな友好関係をお祈り致します。

ペルーの子供たち

横浜市立大学国際文化学部３年
室小野花

日本人がボリビアという地球の裏側に辿り着いて、今年で 100 年。すでに 1 世紀が過ぎた。日本での苦しい生活から逃れるために渡ったそこには、彼らの夢見たような安住の地はなかった。しかしそれでも、彼らはそこで暮らした。辿り着くまでの困難な道程とは果してどのようなものだったのか。日々の生活はいかなるものだったのか。いったい何を糧に日々暮らしたのか。この答えを得るために私たちが選んだ道、それが彼らの通ったという道程の再現であった。彼らの困難を肌で感じなければ見えないものがある。そう信じて私たちは、聖なる川マードレ・デ・ディオスへと漕ぎ出した。しかし、この探検として扱いたいこと、それが私にはもう一つある。ボリビアとペルーの子供たちである。なぜ彼らが私の心に残ったのか、それはわからない。しかし、現在ボリビアとペルーが抱える問題を彼らが写しているように思えてならない。そのはじまりはペルーのクスコだった。

クスコは南米の中でも有数の観光地である。例に漏れず私もそこを訪れた。多くの南米人が行き交い、町並みもまた植民地当時のままなのかヨーロッパを思わせるそこは、それまで私が見てきたペルーとは別世界であった。しかしここで、私は衝撃的な出会いと遭遇した。特に当てもなくふらふらと歩いていた私に向かって小さな女の子が何か言っている。声が小さなことと、私の貧困なスペイン語力で何を言っているのかわからず、思わず聞き返した。“Un sole porfavor” －「1 ソルちょうだい」－女の子ははっきりとそう言っていた。5,6 歳だろうか、弟の手を引いている。私はお金を出すでもなく、ただただ立ちすくんた。「無視するしかないよ」友達の声で我にかえった私は、なにもできないまま、その場を去った。同じような事は何度も起こった。そのたび私は言いようのない悲しみに襲われた。何が悲しいのか。それは、彼らに共通した“乾いた瞳”である。私がペルー・ボリビアにきてもう一ヶ月以上経っていたが、あんなに乾いた瞳の子供には出会った事がなかった。プエルト・マルドナードやリベラルタでも多くの子供たちに会った。その子供たちの多くは貧しかった。しかし、彼らの瞳は子供らしい輝きに満ちていた。彼らはいつもかわいかった。同じ子供なのになぜ？という思いがつきまとう。クスコの少女は自分の意志であの手を出しているのか、もしくは母親だか父親にいわれたのか。それは分からない。しかし、あの手を差し出させている原因の一つは観光客だ。あの少女の瞳を殺したのは、観光客なのである。そして私も観光客の一人だった。残念ながら。しかし、観光客を悪とは言えない。この国において観光客が来る事による外資獲得は、大きな割合に違いないからだ。そう、観

光資源があるための悲劇なのだ。しかし、たとえ生活が貧しくても、他人に金をせびるなどという心まで貧しくなるような事はして欲しくなかった。ガムでもタバコでもいい、何かをせめて売って欲しかった。たしかに、これは日本で生まれ、何一つ不自由なく育ったもののきれいごとでしかないのかもしれないが。自分にできる事は、ただそんな風に手を出してもお金はもらえない、正しい事をしていない、ということをあの子に気づかせるために、あの手を見なかった事にすることだけかもしれない。しかしながら、善悪の判断というものは常に困難である。悪の裏は常に善であるわけではなく、善の裏が常に悪とは限らない。この世は裏と表などという単純なものではなく、複雑極まりない多面体なのだ。

二ヶ月におよぶ南米生活。得ること、考えることは非常に多かった。日本では想像もつかないような雄大な自然、生活習慣の違いからくる価値観のすれ違い、仲間たちの優しさと厳しさ。毎日が新鮮であった。しかし、私の心にいちばん残ったのは子供たちの瞳だった。同じ国内なのに、なぜあんなに違うのか。単純であるようで、しかし考え出すとその背後に隠されたおおきな問題に驚く。それまで、今日が、今が、楽しければいいというような花火人生を送ってきた。しかし、あの子供たちの瞳の奥を知りたいと思う。たとえ子供でも、権利は主張できるはずだ。私にできる事を考えている。

この二ヶ月におよぶ探検は私にとっておおきな意義を持った。あらゆる場面で支えてくれた多くの方々にはただただ感謝の気持ちでいっぱいである。また、頼りない私を最後まで見捨てることなく、面倒を見てくれた隊のメンバーにも重ねてお礼を言いたい。

▲ラパスにて

最後に今回の計画を理解していただき、協賛、協力という形で援助くださった諸団体、諸企業の皆様に深く感謝申し上げます。今回の計画の成功もひとえに皆様のご厚意の賜物と隊員一同、謹んで御礼申し上げます。

町田酒造株式会社
アメリカンエアライン社
イワタニリゾート
モンベル
アース製薬
EMPEX
ALINCO
山本無線
エイアンドエフ
飯塚カンパニー
ＳＢ食品
大塚製薬
ヤマサ醤油
朝日新聞社
神奈川新聞社
毎日新聞社
ＮＨＫ
横浜市
横浜市立大学
横浜市立大学探検部ＯＢ
日本ボリビア大使館
国際協力推進協会
国際協力事業団
ボリビア日本大使館
ペルー日本大使館
サンファン日系人協会
オキナワ日系人協会
リベラルタ日系人協会
グアヤラメリー日系人協会

（敬称略・順不同）

—MEMO—

ボリビア日本移民100周年記念
アマゾン・マードレ・デ・ディオス川
追跡調査報告書
~移民の足跡を辿る~

1999年12月25日　発行
発行所　横浜市大探検部
神奈川県横浜市金沢区瀬戸22-2横浜市立大学内
発行人　　片平 吉秀
編集人　　福栄 太郎
印刷所　有限会社スピード印刷
神奈川県横浜市南区新川2-4-201